

中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第十回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって	1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社(者)一覧	2
中国日本商会役員名簿.....	3
2012年度社会貢献委員会委員名簿	5
2012年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿	6
朱丹団長挨拶	7
主催、共催団体の概要	8
第10回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿	9
第10回訪日 ホームステイ受け入れリスト	10
第10回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程	11
第10回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト	12
< 訪日記録 >	
ワコール本社(5/29)/担当:中国農業大学.....	16
静岡県農林技術研究所/農林大学校(5/30)/担当:中国農業大学	19
ヤマハ発動機(5/30)/担当:首都師範大学	22
資生堂鎌倉工場(5/31)/担当:国際関係学院	24
日本郵船氷川丸/歴史博物館(5/31)/担当:中国伝媒大学	27
JR東日本本社(6/1)/担当:北京交通大学	30
三菱商事本社(6/1)/担当:北京交通大学	32
早稲田大学(6/4)/担当:首都師範大学	35
三菱東京UFJ銀行本店(6/5)/担当:国際関係学院.....	38
ホテルニューオータニ(6/6)/担当:中国伝媒大学.....	40
学生たちの感想文から	42
学生たちの撮った写真	63

第10回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団報告書の刊行にあたって

「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会在2007年から始めた中国人大学生を日本視察に招待する社会貢献事業です。未来の中国を担う若い世代に日本及び日本企業を知ってもらうことを目的に、中国日本商会の総意で実施が決議され、会員有志企業の寄付金によって費用を賄い、過去9回の訪日団で28大学264名の学生を日本に招待しました。

第10回目となる今回は、中国農業大学、北京交通大学、首都師範大学、国際関係学院、中国伝媒大学の5大学から日本に行ったことのない学生30名を選抜して2012年5月28日から6月6日までの10日間、日本に滞在しました。また、5月21日に開催された壮行会には、第7回から9回の訪日団に参加した学生も参加し、交流の輪がさらに広がりました。

視察先は企業では、ワコール本社(京都)、ヤマハ発動機(静岡)、資生堂鎌倉工場(神奈川)、日本郵船氷川丸/歴史博物館(神奈川)、三菱商事本社(東京)、JR東日本本社(東京)、三菱東京UFJ銀行(東京)、ニューオータニホテル(東京)の8社です。その他、中国大使館訪問、静岡県農林技術研究所見学、農林大学や日本の大学生との交流、日本のソフト産業であるアニメ「ワンピース」展示会の見学、一泊二日のホームステイ体験など多岐にわたるプログラムが組み込まれています。ホームステイ受け入れに協力いただいた企業は15社(アルプス電気、伊藤忠商事、キヤノン、JTB、新日鐵、住友商事、全日空、トヨタ自動車、日中経済協会、日本航空、日立、丸紅、三井物産、三菱商事、三菱東京UFJ銀行)にのぼっています。

このように「走近日企・感受日本」事業は、中国日本商会の会員企業の協力によって実施されています。また、共催団体である中国日本友好協会にも全面的な協力をいただいております。訪日団の日本受け入れ、本報告書の編集にあたっては、一般財団法人日中経済協会にご尽力をいただいております。加えて、寄付金の管理につきましては、中国側では中国友好和平発展基金会に、日本側では一般財団法人貿易研修センターにご協力をいただいております。改めて、本事業実施にご協力、ご尽力をいただいた皆様に厚くお礼を申し上げます。

本報告書に寄せられた参加学生のレポートを拝見いたしますと、本事業が学生たちに深い印象を残していることが分かります。本報告書をご一読いただき、日系企業の社会貢献活動の一端と中国の若者たちの真摯な、活気にあふれた姿に触れていただければ幸いです。

第1弾として5年にわたる合計10回の派遣事業は今回で終了となりましたが、中国日本商会では再度会員企業に寄付金を募り、第2弾として今後3年間にわたる合計6回の「走近日企・感受日本」事業実施を決定しました。

本事業が日中相互の国民レベルでの理解促進の一助となり、将来さらに大きな実を結ぶことになれば、これに優る喜びはありません。

中国日本商会 会長 小関秀一
2012年7月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」 寄付金申込社(者)一覧

〔寄付金〕1,000万円

1	朝日ビール株式会社
2	伊藤忠商事株式会社
3	キャノン(中国)有限公司
4	新日本製鐵株式会社
5	住友商事株式会社
6	全日本空輸株式会社
7	トヨタ自動車株式会社
8	NEC(中国)有限公司
9	株式会社日本航空インターナショナル
10	株式会社日立製作所
11	丸紅株式会社
12	株式会社みずほコーポレート銀行
13	三井物産株式会社
14	三菱商事株式会社
15	株式会社三菱東京UFJ銀行

〔寄付金額〕500万円～1,000万円未満

16	株式会社イトーヨーカ堂
17	ソニー(中国)有限公司
18	豊田通商株式会社
19	三井住友銀行

〔寄付金額〕100万円～500万円未満

20	旭化成株式会社
21	味の素株式会社
22	アルプス(中国)有限公司
23	岩谷産業株式会社
24	オムロン(中国)有限公司
25	新日本石油株式会社
26	JFE鋼鉄株式会社
27	大和証券SMBC株式会社
28	株式会社電通
29	東芝(中国)有限公司
30	日産(中国)投資有限公司
31	オークマ株式会社
32	株式会社商船三井
33	株式会社JTB

34	日本たばこ産業株式会社
35	日本農林中央金庫有限公司
36	日本郵船株式会社
37	野村ホールディングス株式会社
38	松下電器産業株式会社
39	三菱化学株式会社
40	三菱電機株式会社
41	ワコール(中国)時装有限公司

〔寄付金額〕10万円～100万円未満

42	株式会社IHI
43	あいおい損害保険株式会社
44	アルパイン(中国)有限公司
45	インテック国際科学技術有限公司
46	川崎汽船株式会社
47	キッコーマン株式会社
48	協和発酵工業株式会社
49	株式会社組合貿易
50	KDDI 株式会社
51	五洲大氣社工程有限公司
52	J-POWER電源開発株式会社
53	JVC(中国)投資有限公司
54	住金物産株式会社
55	住友化学株式会社
56	住友電気工業株式会社
57	積水化学工業株式会社(京都研究所)
58	双日株式会社
59	太平洋セメント株式会社
60	宝酒造株式会社
61	株式会社竹中工務店
62	大日本印刷株式会社
63	大福自動輸送機(天津)有限公司
64	長富宮中心有限責任公司
65	帝人株式会社
66	株式会社東京機械製作所
67	東工コーセン株式会社
68	東レ株式会社

69	トヨタモーターファイナンスチャイナ
70	株式会社日新
71	株式会社損害保険ジャパン
72	マルチメディア振興センター
73	日本東京海上日動火災保険株式会社
74	日立高科技貿易(上海)有限公司
75	日立租賃(中国)有限公司
76	阪和興業株式会社
77	ブラザー(中国)商業有限公司
78	北京HYFソフト有限公司
79	北京キューピー食品有限公司
80	北京KDDI 通信技術有限公司
81	北京宏達日新電機有限公司
82	北京新世紀日航飯店
83	北京図新経緯導航系統有限公司
84	北京日立華勝信息系統有限公司
85	北京日立控制系統有限公司
86	北京村田電子有限公司
87	本田技研工業(中国)投資有限公司
88	前田建設工業株式会社
89	三井化学株式会社
90	三井住友海上火災保険株式会社
91	三菱自動車工業株式会社
92	三菱重工業株式会社
93	三菱UFJ証券株式会社
94	三菱UFJ信託銀行
95	明治安田生命保険相互会社
96	明和産業株式会社
97	柳田 洋
98	湯浅 弘
99	理光軟件研究所(北京)有限公司
100	ヤマハ発動機株式会社

〔寄付金額〕10万円未満

101	北京エプソン電子有限公司
102	北京集佳知識産権代理有限公司
103	日本海事協会

2012年度中国日本商会役員一覧

7月度現在

	商会役職	氏名	会社名	役職
1	会長	小関 秀一	伊藤忠	常務執行役員 東アジア総代表
2	副会長	杉浦 康誉	アサヒグループホールディングス	執行役員 中国代表部 北京代表
3	副会長	木戸脇 雅生	NEC(中国)	執行役員 中国総代表 総裁
4	副会長	小澤 秀樹	キヤノン	常務取締役 中国総裁
5	副会長	林 岳志	新日本製鐵	中国総代表 北京事務所長
6	副会長	幸 伸彦	住友商事	常務執行役員 中国総代表
7	副会長	稲田 健也	全日本空輸	上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長
8	副会長	佐々木 昭	トヨタ自動車(中国)投資	董事長
9	副会長	田村 暁彦	日中経済協会	北京事務所 所長
10	副会長	酒匂 崇示	日本貿易振興機構	北京代表処 所長
11	副会長	北山 隆一	日立(中国)	執行役常務 中国総代表
12	副会長	鹿間 千尋	丸紅	常務執行役員 中国総代表
13	副会長	宮口 丈人	みずほコーポレート銀行(中国)	董事長
14	副会長	瀬戸山 貴則	三井物産	専務執行役員 中国総代表
15	副会長	矢野 雅英	三菱商事	副社長執行役員 東アジア統括
16	副会長	久木田 崇彰	三菱電機	中国総代表
17	副会長	柳岡 広和	三菱東京UFJ銀行(中国)	董事長
18	理事	高橋 修	岩谷産業	常務執行役員 中国総代表
19	理事	川崎 一彦	双日(中国)	常務執行役員 中国総代表
20	理事	近藤 隆弘	豊田通商	執行役員 中国総代表
21	理事	菊池 哲	阪和興業	理事 中国副総代表華北担当兼北京所長 兼大連所長
22	理事	荒川 英典	住金物産	北京事務所大連事務所 所長
23	理事	竹川 善雄	旭硝子自動車玻璃(中国)	董事長
24	理事	神谷 雅行	旭硝子(中国)投資	常務執行役員 中国総代表
25	理事	山田 晶一	NTTファシリティーズ	総経理
26	理事	武川 昌俊	JX日鉱日石エネルギー	常務執行役員 中国総代表 北京事務所長
27	理事	長瀬 裕和	月島環境機械(北京)	総経理
28	理事	松岡 豊人	東京電力	北京代表処 首席代表
29	理事	碓田 聖史	三菱重工業	中国総代表
30	理事	勾坂 行男	アルプス(中国)	総経理
31	理事	稲葉 雅人	NTT	理事 中国総代表
32	理事	堂園 憲治	NTT通信系統(中国)	北京分公司 総経理
33	理事	二方 歩	NTTドコモ	北京事務所 所長
34	理事	山田 正晴	京セラ	北京代表処 首席代表
35	理事	久保田 陽	ソニー	常務執行役員 中国総代表

36	理事	桐山 輝夫	東芝	執行役常務 中国総代表
37	理事	大澤 英俊	パナソニックチャイナ	役員 中国・東アジア総代表
38	理事	箕田 好文	富士通(中国)	董事長
39	理事	庄司 周平	マルチメディア振興センター	北京代表処 首席代表
40	理事	森山 博之	旭化成	北京事務所 所長
41	理事	中村 総明	伊藤喜商貿(上海)	北京分公司 総経理
42	理事	中嶋 孝	王子製紙	参与 中国事業本部本部長 北京事務所所長
43	理事	西 広信	住友化学投資(中国)	総経理
44	理事	矢野 公一	大日本印刷	北京代表処 常駐代表
45	理事	陳 偉東	中外製薬	北京事務所 首席代表
46	理事	寺師 啓	東レ	北京事務所 所長
47	理事	得丸 洋	三井化学	社長補佐(専務執行役員待遇) 中国総代表
48	理事	瀬川 拓	三菱化学	理事 中国総代表
49	理事	家森 誠一	日本興亜損害保険	駐中国総代表処 中国総代表
50	理事	李 永梅	日本生命	北京代表処 首席代表
51	理事	新川 陸一	日本銀行	北京事務所 首席代表
52	理事	宋 曉晨	みずほ証券	北京代表処 首席代表
53	理事	今川 真一郎	三井住友銀行(中国)	北京支店長
54	理事	陳 志成	三菱UFJ信託銀行	北京代表処 首席代表
55	理事	須藤 信也	日通国際物流(中国)	董事社長
56	理事	山口 栄一	日本航空	執行役員 中国総代表 北京支店長
57	理事	永井 圭造	日本郵船	経営委員 中国総代表
58	理事	三枝 富博	イトーヨーカ堂	執行役員 中国室長
59	理事	山崎 道德	JTB CHINA	執行役員 中国総代表
60	理事	飯島 茂	全日空国際旅行社	総経理
61	理事	宮本 賢治	長富宮中心	総支配人
62	理事	近藤 重和	電通	北京事務所 所長
63	理事	川畑 保	北京発展大廈	董事 総経理
64	理事	田淵 真次	日中経済貿易センター	専務理事 北京事務所長
65	理事	中下 裕三	日本国際貿易促進協会	北京事務所 中国総代表
66	理事	石舘 周三	資生堂(中国)研究開発中心	董事 総経理
67	理事	勝又 賢一	北京日立華勝情報系統	総経理
68	理事	水谷 彰伸	三井住友海上火災保険(中国)	北京分公司 総経理
69	理事	大澤 久	三井不動産諮詢(北京)	董事 総経理
70	理事	片平 猛	電源開発	常務執行役員・中国総代表
71	理事	熊澤 一	ブラザー(中国)商業	副総経理 知識産権部長
72	理事	三谷 達巳	北京キューピー食品	総経理
73	監事	原井 武志	監査法人トーマツ	パートナー
74	監事	菊池 洋	国際協力銀行	首席代表

2012年度社会貢献委員会委員名簿

	氏名 (会社名・役職)
社会貢献委員長	鹿間 千尋 (丸紅 常務執行役員 中国総代表)
委員	小関 秀一 (伊藤忠 常務執行役員 東アジア総代表)
委員	杉浦 康誉 (アサヒグループホールディングス 執行役員 中国代表部 北京代表)
委員	木戸脇 雅生 (NEC 執行役員 中国総代表)
委員	小澤 秀樹 (キヤノン 常務取締役 中国総裁)
委員	林 岳志 (新日本製鐵 中国総代表 北京事務所長)
委員	幸 伸彦 (住友商事 常務執行役員 中国総代表)
委員	稲田 健也 (全日本空輸 上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長)
委員	佐々木 昭 (トヨタ自動車(中国)投資 董事長)
委員	田村 暁彦 (日中経済協会 北京事務所長)
委員	酒匂 崇示 (日本貿易振興機構 北京代表処 所長)
委員	北山 隆一 (日立 執行役常務 中国総代表)
委員	宮口 丈人 (みずほコーポレート銀行(中国) 董事長)
委員	瀬戸山 貴則 (三井物産 専務執行役員 中国総代表)
委員	矢野 雅英 (三菱商事 副社長執行役員 東アジア統括)
委員	久木田 崇彰 (三菱電機 中国総代表)
委員	柳岡 広和 (三菱東京UFJ銀行(中国) 董事長)
委員	山口 栄一 (日本航空 執行役員 中国総代表 北京支店長)
委員	高羽 人志 (JTB 北京事務所 事務所長)

2012年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	鹿間 千尋	丸紅 常務執行役員 中国総代表
【WG座長】	田村 暁彦	日中経済協会 所長
アサヒビール(株)	飯塚 喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集団有限公司	篠原 弘樹	中国人事・総務部長代行
キヤノン(中国)有限公司	柴丸 茂	Vice President
新日本製鐵(株) 北京事務所	長南 隆	代表
(株)JTB 北京事務所	高羽 人志	事務所長
住友商事(中国)有限公司	能勢 敦司	華北管理部門 総括部 副部長
	韓 建平	総括部 総務科長
全日本空輸(株) 北京弁事処	柏木 寿州	銷售部 經理
東芝(中国)有限公司	東口 雄一郎	総裁室 室長
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田 弘毅	渉外部主査
(財)日中経済協会	高見澤 学	所長代理
日本航空インターナショナル	上り浜 健一	北京支店銷售部総經理
日本貿易振興機構 北京センター	島田 英樹	進出企業支援センター センター長
日立(中国)有限公司	佐々木 良二	副総經理
丸紅(株) 北京事務所	稲積 和典	総代表助理
三井物産(株) 北京事務所	全 平	經理
三菱商事(中国)商業有限公司	李 征	企画發展部 經理
三菱電機(中国)有限公司	原 正英	副総經理
三菱東京UFJ銀行(中国) 北京支店	杉山 昌史	企画課長
みずほコーポレート銀行(中国) 北京支店	西村 浩二	総務課 課長
【オブザーバー】	柳澤 好治	日本大使館 広報文化センター 一等書記官
【オブザーバー】	平嶋 隆幸	日本大使館 經濟部 三等書記官
【訪日中のアテンド等】	渡辺 光男	日中経済協会 (東京) 総務部参与

第10回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团報告書 团长挨拶

5月末、第10回「走近日企・感受日本」中国大学生代表团一行による日本への友好訪問を無事終え、「走近日企・感受日本」プロジェクト第一期計画が所期の目的を達成し、成功裏に幕を閉じました。

この度、中国日本商会、日中経済協会、貿易研修センター、商会各会員企業の準備の下、ワコール株式会社、ヤマハ発動機株式会社、資生堂の鎌倉工場、三菱商事本社、三菱UFJ銀行、日本郵船などの企業を訪問し、行く先々で温かい歓迎を受けました。また、静岡県農林技術研究所やホテルニューオータニの環境関連施設の見学や、著名な早稲田大学の学生との交流もありました。さらには週末を利用して日本の一般家庭にホームステイし、日本人の生活を身近に体験することができました。中国の大学生も文字通りの「走近日企・感受日本」を実践し、日本人の中国人に対する温かい友情の念を感じることができました。

今年は中日国交正常化40周年にあたり、中日国民友好交流年でもあります。「国の交わりは国民の親しい交流にある」とも言われますが、民間の友好交流こそが中日友好の基盤であり、今後も引き続き中日両国の民間友好交流を推進していくと同時に、中日青少年の友好交流活動にも力を入れていきたいと思っております。「走近日企・感受日本」中国大学生訪日プロジェクトは既に10回実施されて大きな成果を挙げております。同プロジェクトは両国の国民、特に青年間の相互理解を増進する上で重要な役割を果たして来たと言えます。中日友好協会は今後も中国日本商会と協力してプロジェクトの第二期計画を実施し、中日友好に貢献できる多くの青年を育成し、両国の若い力を以って共に中日両国の末永い友好関係の構築を目指していきたいと思っております。

第10回中国大学生訪日団 团长 朱丹

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2012年6月末日現在、市内法人会員627社、市外法人会員54社、個人会員24名、賛助会員8名の合計713社(名)を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

財団法人貿易研修センター

国際的な経済活動に携わる官民の人材の育成と我が国と外国との経済交流促進を目的に、「貿易研修センター法」に基づく特別認可法人として1967年に設立された。

財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第10回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓 名	性別	所 属		専 攻
団 長	朱丹	女	中国日本友好協会	副秘書長	
団 員	于文華	女	国際関係学院	日仏語系	日本語
団 員	呂凱健	男	国際関係学院	日仏語系	日本語
団 員	欧陽文俊	男	国際関係学院	日仏語系	日本語
団 員	王瀚霖	男	国際関係学院	日仏語系	日本語
団 員	李琳	女	国際関係学院	日仏語系	日本語
団 員	李中石	男	国際関係学院	日仏語系	日本語
団 員	衣虹暎	女	中国伝媒大学	コンピュータ学院	コンピュータ科学と技術
団 員	趙先明	男	中国伝媒大学	コンピュータ学院	コンピュータ科学と技術
団 員	楊天笑	男	中国伝媒大学	アニメ・デジタル芸術学院	デジタルメディア芸術
団 員	王藝霏	女	中国伝媒大学	情報工程学院	放送テレビ
団 員	王芳	女	中国伝媒大学	外国語学院	日本語
団 員	李慧雯	女	中国伝媒大学	外国語学院	英語
団 員	楊妍	女	中国農業大学	水利・土木工程学院	水利水力発電
団 員	付彪	男	中国農業大学	生物学院	生物科学
団 員	曾歆	女	中国農業大学	動物医学院	動物医学
団 員	尹肖貽	男	中国農業大学	情報・電気工程学院	理科実験班
団 員	吳楊宇	男	中国農業大学	食品科学・栄養工程学院	生物工程
団 員	王丹	女	中国農業大学	動物科学・技術学院	動物科学
団 員	牛駿宇	男	北京交通大学	電子情報工程学院	オートメーション
団 員	瀋慧	女	北京交通大学	コンピュータ・情報技術学院	生物医学
団 員	張蓁	女	北京交通大学	言語・伝達学院	外国語
団 員	傅一楠	女	北京交通大学	理学院	情報・コンピュータ科学
団 員	景鵬	男	北京交通大学	電子情報工程学院	通信
団 員	謝德宝	男	北京交通大学	言語・伝達学院	英語
団 員	孫麗娜	女	首都師範大学	文学院	高級対外秘書
団 員	黄毅鴻	男	首都師範大学	歴史学院	世界史
団 員	楊言	女	首都師範大学	外国語学院	日本語
団 員	齊暢	女	首都師範大学	外国語学院	日本語
団 員	楊肖肖	女	首都師範大学	外国語学院	日本語
団 員	孫鑑	男	首都師範大学	外国語学院	日本語
団 員 (事務局)	郭寧	女	中国日本友好協会	都市・経済交流部副部長	
団 員 (事務局)	劉夢妍	女	中国日本友好協会	都市・経済交流部幹部	
団 員 (引率教員)	張慧	女	国際関係学院	教員	
団 員 (引率教員)	李剛	男	北京交通大学	校団委弁公室主任、宣伝部 部長	

第10回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日付	日程	宿泊
1	5月28日 (月)	午後 <u>国際線 (NH160便) にて北京空港発 (14:35発)</u> <u>関西国際空港着 (18:20着予定)</u> ホテルへ	ホテルニューオー タニ大阪
2	5月29日 (火)	08:30 大阪から京都に移動 09:30~11:30 <u>ワコール本社訪問</u> 午後 京都市内見学(高台寺茶道体験、清水寺) 夕刻 <u>浜松へ移動 (新幹線利用) ひかり478京都17:56→浜松</u> <u>19:05</u> ホテルへ	ホテルコンコルド浜 松
3	5月30日 (水)	09:00~11:15 <u>静岡県農林技術研究所見学/農林大学校交流</u> 11:30~15:00 <u>ヤマハ発動機訪問 (昼食含む)</u> 夕方 <u>浜松へ移動 (新幹線利用) こだま662掛川16:03→小田</u> <u>原17:11</u> 箱根湯本温泉	ホテルおかだ
4	5月31日 (木)	07:45 箱根から鎌倉に移動 09:00~11:00 <u>資生堂鎌倉工場見学</u> 14:30~17:00 <u>日本郵船氷川丸/歴史博物館見学</u> ホテルへ	ホテルニューオー タニ
5	6月1日 (金)	10:00~11:30 <u>日本のソフト産業見学: ONE PIECE展 (六本木ヒルズ)</u> 13:30~15:30 <u>JR東日本本社訪問 (新宿)</u> 16:00~19:30 <u>三菱商事本社訪問 (夕食懇親会含む)</u> ホテルへ	ホテルニューオー タニ
6	6月2日 (土)	09:30~10:00 日中経済協会にてホストファミリーと面会 終日 ホームステイ	ホームステイ
7	6月3日 (日)	夕刻までホームステイ 16:00 ホテル集合 秋葉原およびお台場で自由行動	ホテルニューオー タニ
8	6月4日 (月)	08:30 都内見学 09:00~10:30 東京タワー 11:00~12:00 松本楼の紹介 12:00~13:00 昼食:日比谷松本楼 14:30~19:30 <u>早稲田大学 (夕食懇親会含む)</u> ホテルへ	ホテルニューオー タニ
9	6月5日 (火)	10:00~13:00 <u>三菱東京UFJ銀行本店訪問 (昼食含む)</u> 14:00~15:30 <u>中国大使館訪問</u> 午後~夜 ディズニーランド観光 ホテルへ	ホテルニューオー タニ
10	6月6日 (水)	09:00~10:30 <u>ホテルニューオータニエコ見学</u> 昼食: <u>歓送パーティー (ホテルニューオータニ)</u> 午後 バス利用で成田空港へ移動 <u>国際線 (NH955) (17:25発) にて帰国 (20:30着)</u>	

第10回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団視察先出席者リスト

1. 株式会社ワコール本社（5月29日）

井出 雄三	国際本部長		
石田 勝之	広報・宣伝部	広報課	
艸川 康代	広報・宣伝部	広報課	
藤原 薫	人間科学研究所	基礎研究課	
関口 満	国際本部	中国アジア部長	
川西 啓介	〃	中国アジア部	中国課長
伊藤 卓治	〃	事業管理部	事業管理課長
王 楠	〃	中国アジア部	中国課

2. 静岡県農林技術研究所/静岡県立農林大学校（5月30日）

山田 栄成	静岡県立農林技術研究所	企画調整部	班長
安井 貢	静岡県立農林大学校		校長
白松 太美男	〃		副校長
川瀬 範毅	〃	教務課	技監兼教務課長
山崎 俊弘	〃	〃	研究班長
岡本 伸子	〃	〃	研究班 非常勤講師
増田 壽彦	〃	教務課	養成班長
青木 一由	〃	〃	養成班 主幹兼副班長
藤浪 裕幸	〃	〃	〃 主査
大石 竜	〃	〃	〃 技師
勝岡 弘幸	〃	〃	〃 〃

3. ヤマハ発動機株式会社本社（5月30日）

多田 栄治	MC事業本部第3事業部	マーケティング部長	
菅井 利光	〃	マーケティング部中国グループ	グループリーダー
本丸 勝彦	〃	〃	
山本 千賀	〃	〃	
藤城 ゆかり	〃	〃	
深町 弘恵	〃	〃	
希 靖	原価革新統括部	原価革新部MCPJ推進グループ	
倉崎 普文	生産戦略統括部	海外生産部第3テリトリーグループ	グループリーダー
村松 久義	〃	〃	
平松 修	BD SYS技術部	管理課	総務係
杉浦 優	〃	〃	〃

石原 信一 人事総務統括部 広報宣伝部 企業広報グループ グループリーダー

4. 株式会社資生堂鎌倉工場 (5月31日)

平井 純子 鎌倉工場 管理部
葉 美香 // //
石井 美幸 // //
蜂屋 香菜子 // //
佐藤 美智江 // //
尾形 亜澄 // //
加藤木 陽子 本社 グローバル薬務推進部
千葉 真知子 //
武井 啓吾 本社 中国事業部 企画管理部

5. 日本郵船株式会社氷川丸/歴史博物館 (5月31日)

脇屋 伯英 日本郵船歴史博物館 館長代理
宇佐美 順一 // グループ長代理
長久 英子 //
金谷 範夫 日本郵船氷川丸 船長

6. 東日本旅客鉄道株式会社本社 (6月1日)

佐々木 誠 総合企画本部 国際業務部 国際交流グループ
大沼 富昭 日中鉄道友好推進協議会 事務局長
王 元怡 通訳

7. 三菱商事株式会社本社 (6月1日)

中原 秀人 副社長
今田 勝之 リテイル事業ユニット チームリーダー
西原 真司 企画業務部 国内・東アジアチームリーダー
横山 勝明 // 国内・東アジアチーム
大島 京子 // //
安達 健 // 経済調査チーム
万 牧 // 渉外企画チーム(香港三菱より出向中)
李 征 三菱商事(北京)有限公司
川島 美子 総務部 総合チーム
(懇親会参加)
河合 耕作 企画業務部 部長代行
宇野 博史 // 国内・東アジアチーム
森原 康夫 // //

木下 勝孝	〃	〃
櫛場 紀子	〃	〃
門田 みなみ	〃	経済調査チーム
田口 絢子	〃	米州チーム
李 璐	法務部(北京三菱より出向中)	
高 鵬	排出権事業ユニット(北京三菱より出向中)	
趙 明	重電機輸出ユニット	〃
呂 峰	〃	〃
郭 坤	機械管理部	〃

8. 日比谷松本楼 (6月4日)

小坂 文乃 常務取締役企画室長 (梅屋庄吉曾孫)

9. 早稲田大学 (6月4日)

江 正殷	国際部	東アジア部門長
白木 三秀	政治経済学術院	教授
佐藤 洋一	国際部	留学センター
楊 振	国際部	国際課
中越 明子	国際部	国際課

その他に白木ゼミ学生約40名、キャンパスツアーの学生ボランティアガイド2名が参加

10. 株式会社三菱東京UFJ銀行本店 (6月5日)

小野寺 隆実	常務執行役員	アジア本部長	
室井 清孝	アジア本部	アジア企画部	中国グループ 次長
田辺 智彦	アジア本部	中国室	副室長
飯川 幸彦	本店総務課	次長兼課長	
楊 敏	外貨資金証券部	外債ポートフォリオグループ	
濱田 潔	アジア本部アジア企画部	中国グループ	上席調査役
木部 英幸	〃	〃	〃
梅原 直樹	〃	〃	調査役
大野木 はづき	〃	〃	〃
武 進	〃	〃	〃
山口 恵美	〃	〃	
海老沢 美穂	〃	〃	

11. 中国大使館 (6月5日)

程 永華	特命全権大使		
汪 婉	大使夫人	参事官	友好交流部担当
陳 炳炎	経済商務処	一等書記官	
孟 素萍	友好交流部	一等書記官	
趙 偉	大使秘書	一等書記官	
王 麟	友好交流部	三等書記官	

12. ホテルニューオータニ (6月6日)

山本 正巳	ファシリティマネージメント部	ファシリティマネージメント課	マネージャー
三浦 光昌	ファシリティマネージメント部	ファシリティマネージメント課	係長
長嶋 慶一	宿泊営業部	グローバルマーケティング&セールス課	シニアセールスマネージャー

責任がワコールを育む

中国農業大学学生代表

見学日時：2012年 5月29日（火） 09:30-11:30

見学場所：株式会社ワコール

見学概要：



ワコール(Wacoal)は、日本の著名下着ブランドで、下着を主とする既製衣料品メーカーである。1949年に設立されたWacoalは成長を続け、今やフルラインのレディースファッションメーカーになっている。また、CWXSスポーツウェア、子供服、紳士服、高齢者用衣料の分野も拡大を続けている。

ワコールの本社は歴史色豊かな京都にある。本社ビルは10数階の高い建物だ。高層ビルの建設を規制している京都において、Wacoalのロゴとピンクリボンのマークの付いた白いビルはとても目立つ。

今回の見学の主な内容は会社紹介、宣伝用DVD、下着博物館、製品展示ホールの見学で、最後には質疑応答の時間も準備されていた。会社紹介はある質問から始まった。「どんな会社が今後数十年、百年に渡って輝き続けることができると思うか」。ワコールの答え

は「社会的責任を果たすことのできる会社だけが、今後も存続し続け、より輝きを増していく」というものだった。60数年来、ワコールは一貫して「世の女性をより美しくすることで社会に貢献していく」という理念を掲げつつ一步一步歩みを進め、それぞれ異なる年齢層と用途に合った下着の開発に専心して来た。それは単に最高のモノづくりを目指し、一枚のレースも熟練工が手縫いするということだけではない。常に製品の機能向上に力を尽くし、「何も身に着けていない時よりも快適」な下着の開発をするための努力の連続だった。

宣伝用DVDを見て、ワコールが女性の意識向上を図って乳がんの早期発見と、乳がんを患う女性の体形矯正を助ける「ピンクリボン」運動(Wacoal Breast Care Activities)を展開していることを知った。街の至る所に乳がん検診バスが停まり、日本女性に歓迎されていた。また、ワコールは資源のリサイクルに役立つブラ・リサイクル・プログラム(Bra Recycling Program)や思春期の女の子向けに健康知識に関する宣伝教育(Tsubomi School)などのプロジェクトを展開している。

ワコールは京都に人間科学研究所を持っており、そこに集められた4万人以上の女性の体形データが新しい下着の開発のために提供されている。また、研究所では、一人の女性の30年間に及ぶ体形の変化を追跡して異なる年齢層向けの下着を開発している。以前は、女性の体形データの計測は煩雑で約1時間かかったが、今は「三次元計測装置」が開発されたことで、女性の体形データの計測がわずか5秒で済むようになった。これも研究所の技術力による社会貢献だ。

「美の博物館」(Museum of Beauty)では昔と今の宣伝ポスターを比べてみて、ワコール製品がどのように変化して来たかをおおよそ理解した。館内にはワコール創業当時のアクセサリー、「ブラパット」やその後の革新的製品に至る製品の数々が陳列され、中には世界的な賞を受賞したのものもあった。ワコールの製品は多種多様だ。乳幼児から高齢者までの各年齢層の女性や男性の下着がある。事業範囲も日本からアジア、欧米にまで拡大し、それぞれの市場向けに材質の違う製品を投入するなどして、現地の顧客ニーズと審美的ニーズに対応している。

質疑応答の時に中国農業大学のある団員が、「ワコールの製品は中国ではハイエンド製品になるため、若者、特に大学生はワコールというブランドについてあまりよく知らない。今後、こうした若者をターゲットにした市場を開拓してい

く計画はあるか」と質問すると、「中国でも200元前後のワコールの下着が売られている。今はまだ店舗数が少ないが、小売店をいくつかオープンして知名度の拡大を図っている」という答が返って来た。

見学を終え、車の中からワコールの従業員たちに手を振って別れた。淡い霧雨の中、車が遠ざかるまで手を振るのがぼんやりと見えた。小さな事だが、見学はこうした感動の連続だった。



知っていますか？

Q:1枚の下着を作るのにいくつの生地パーツが必要か？

A:答は40枚。この40枚の生地材質と縫製技術がワコールの品質を保障している。

ワコールは下着のサイズや角度に合ったデザインを心がけ、材質を選ぶときも繰り返し試験を行っている。

Q:ワコールの経営理念は？

A:「世の女性をより美しくすることで社会に貢献していく」。

Q:ワコールの責任感はどれだけ強いのか？

A:ある数字を使ってワコールがいかに責任感の強い会社であるかを説明したいと思う。

京都にあるワコール人間科学研究所には約4万人の女性の体形データがある。年齢幅は子どもから60歳以上の高齢者に及ぶ。データの中には同じ女性の4歳から18歳までの成長を追った時系列のデータや、妊娠初期から産後6か月の体形変化を示すデータもある。また人が動いている時の人体の形態変化を計測して生理面と心理面の研究を行っている。これらの膨大なデータは貴重な財産であり、ワコールのデザインや製品を製造する際のベースになっている。このような計測には多くの時間・労力・資材が必要になるが、ワコールは毎年これを行っている。そうすることがお客様と社会に対する責任だと思っているからだ。

感想：

ワコール本社で製品の一部と博物館を見学した。下着メーカーとして、ワコールが女性の美に対して責任を持つということが、いかに難しく貴重なことであるかを実感した。こうした意識に加え、厳密な研究方法と優れた製造技術が、ワコールを世界で最も成功した下着ブランドの一つにしているのだと思った。

博物館の見学は感動的だった。創業者の「女性の美のために力を捧げる」という初志を理解することができた。こうした創業者の指導の下、ワコールは最高のものを求めて、心地良く美しい下着のための開発を行って来た。開発の始まった1920年代以来、下着はますます美しく快適なものになっている。また、1960年代からはブラジャーが締め具合を調節できるようになり、下着の快適さが更に高められている。計測技術も改良されている。以前は1人の女性の体形データを計測するのに1時間かかったが、今はわずか5秒で済むという。体の凹凸を等高線によって表示する技術も、コンピュータで受けた光信号を計測に用いることで精度が大幅に向上している。

見学の最初にワコールの海外部長から一つの質問が投げかけられた。「どのような企業が50年、100年或いはもっと長い時間存続できると思うか」。企業が長く存続するために最も重要なことは社会的責任であって、目先の利益を追うことではないということをついつい忘れてしまいがちになる。社会的責任を果たすことは、実は会社と消費者にとってはウインウインの関係である。企業が社会的責任を担い、人々の生活をより良いものにしていくという発想には(ピンク

リボン運動は女性が乳がんを早期発見するように援助している)、企業が社会的活動を通じて影響力を拡大していくという側面があり、一種のPR行為とも言うことができる。

どうすれば企業として突出した競争力を持つことができるか。これは一見、企業の社会的責任とは無関係のようにも見えるが、実は両者は密接に関係し合っている。社会と企業は、ある意味、「互恵互利」の循環である。利益を得ること以外に、社会の発展や科学技術、生活水準の向上のために努力をする企業こそが、社会的責任をしっかりと果たしている企業として長く消費者の心に残ることになる。人が成功するためには、自分自身の行為に責任を持たなければならないように、企業の成功にも責任感が伴うことになる。企業には自分自身、顧客、社会のそれぞれに対し責任を果たすことが求められている。

中国でも成功している下着メーカーが何社かあるが、ワコールには彼らが学ぶべきものが多々あるように思う。技術開発や社会的責任の面で深く消費者の心に浸透し、人々に称賛される下着ブランドが中国にも誕生するように願っている。優れた技術と誠実な理念に裏打ちされたワコールは今後も間違いなく成長し続けることだろう。

農業の成功は技術によって導かれる

中国農業大学学生代表

見学日時：2012年5月30日(水) 09:00-11:15

見学場所：静岡県農林技術研究所及び農林大学校

見学概要：

日本は人口に比べて国土が狭く、自然資源の乏しい国だが、日本はその狭く資源の乏しい中で、世界的にも農業の発達した国の一つになっている。また、多くの農業指標で他の先進国をリードしている。静岡県はほぼ日本の中央に位置し、太平洋に面している。静岡県は農業大県として全国に知られているが、中でも茶葉生産量が日本一、全国的に有名なものに温室メロン、イチゴ、トマト、みかん、生花がある。

2012年5月30日、朝の新鮮な空気の中、静かな落ち着いた環境の中にある静岡県農林技術



研究所に着いた。研究所の先生が温かく迎えてくれた。研究所の概況や革新的な研究成果についての説明があった後、研究所の農業博物館を案内してもらった。最後に、温室を見学しているいろいと温室についての説明を聞いた。風速風向計や雨量計の観測データにより温室を覆っているフィルムを自動で昇降させる先進的器械や、すでに幅広く応用されている太陽光発電設備についても紹介された。見学中も先生が学生たちの質問に熱心に答えてくれた。

1900年に設立された静岡県農事試験場(Shizuoka Prefectural Farm Experiment Station)が静岡県農林技術研究所の前身であり、110年に及ぶ歴史の中で所在地の移転や体制改革等を経て現在のような研究所となった。研究所には野菜科、花き科、作物科、育種科、経営・生産システム科、品質・商品開発科、植物保護科、土壌環境科、病害虫防除所、茶葉研究センター、果樹研究センター、伊豆農業研究センター、森林・林業研究センター等の部門がある。

どうすれば温室の日照条件が良くなるか、どうすればメロンの味がもっと美味しくなるか、どうすれば観賞花の開花時期を長くできるか、より良い酒造好適米を選択・育成するにはどうしたらいいか、どうすればもっと効率良く品質検査ができるか、どうすればイチゴ農家の収穫がもっと楽になるか、どのような農業経営方式が農家の利益と経済発展により有利か……等々。こうした問題を解決するための研究が行われている。

具体的な取り組みと成果には以下がある。①無土壌栽培培養液を循環利用したバラの品種改良。横方向に成長させるようにして、枝が縦方向に伸びることでもたらされる栄養のロスを減らし、栄養液が十分に花に行きわたるようにしている。②徐放性肥料の開発。この種の化学肥料は作物の根の近くにだけ散布して土壌には撒かないが、こうすることで農薬汚染が緩和されるほか、化学肥料の使用量を節約することができる。③弱毒苗を使った病虫害の生物的防除。④ロボットを使った糖度別のイチゴの選別。⑤「誉富士」と命名された酒造好適米の開発。「誉富士」は全国20以上の酒造会社で使われている。これらの成果は一部であって、実際はもっと多くの成果をあげている。

温室の中ではさまざまな研究が進められていた。研究所は市場のニーズに合った、天然資源を合理的に利用した、環境の保護にも配慮した、農家が生産するのに便利な作物の開発に取り組んでいる。静岡県農林技術研究所に隣接して静岡県立農林大学校があった。ある作物を開発しても、農家が十分にその栽培技術をマスターしなければ、それは机上の空論でしかなく、全く意味をなさない。ここの学生たちは研究所の最新の研究成果を学べるだけでなく、

最もスピーディーにそれらを農業実践に応用することができる。日本では価値ある研究成果の一つ一つがよく普及され、研究所で開発された種子や技術を使って科学的で環境にやさしい日本ならではの価値の創造がなされていた。



知っていますか？

Q: 静岡県立農林大学校の農業試験場の各温室のメンテナンスにはいったいどれぐらいの人手が必要か？

A: 1人未満。100以上ある温室を合計約60人のスタッフとエンジニアでメンテナンスしている。現代的手法で人手のいる作業を大幅に減らしている。これも高い人件費の節約になっている。

Q: 作物の施肥でさらに有効的な方法はあるか？

A: 一般的施肥の代わりに部分施肥という方法がある。作物の根系の近くだけに肥料を撒くので、肥料の利用効率がアップし、肥料の環境に与えるマイナスの影響を減らすことができる。また、特殊処理を施した肥料を使っているが、この種の肥料は栄養成分の徐放が可能で、土地を富栄養化させるということがなく、環境にやさしいものという方針にも合っている。

Q: 3/4温室とは？

A: 温室の屋根が、高いほうが低いほうの3/4しかなく、材料の節約ができる。ハウス内の栽培棚はどの列の植物も十分に太陽光を浴びることができる様、列毎に高さを調整している。

Q: 農家はどのように農産品の販売をしているのか？

A: 事業体を設立している。生産・供給・販売を一体化した経営によって分散した小規模農家を結合させ、農家の利益を確保し、産業チェーンを規模化及び規範化することで管理の利便性を高めている。日本で行われている生産・供給・販売を一体化するための前提は、構造・配置・分布が合理的、かつ機能が揃い、インフラ設備の整った農産品卸売市場の存在である。日本の農畜産水産品は主に各県や各大中都市の自治体または業者によってつくられた各レベルの中央卸売市場または家畜家禽屠殺卸売市場を経由して小売システムに送られ、農産品の流通という難題を解消している。

感想:

まず静岡で感じたことは、農家と都会で暮らす人たちとの生活レベルにほとんど差がないという点だった。むしろ都会の喧騒から離れた田舎暮らしのほうが幸福度は高いかもしれない。東京のような大都会で生活していれば、プレッシャーもかなりのものだと思う。

次に感じたことは、農家の作業に科学技術的要素が含まれているという点である。オートメーション化のレベルが高く、農家が最新の研究成果を使えるような仕組みになっていた。こうした点から見ると、中国の農業にはまだまだ進歩の余地があるように思う。中国の農業に向けられる研究開発費は毎年結構な額に上り、研究成果(交雑水稲など)も少なくない。ところが、多くの場合、研究成果が普及されずにいる。「科学技術の下郷(地方・農村への普及)」が提起されてから何年も経ち、確かに一定の効果はあがっているが、それらはまだ不十分で、科学的な養殖や栽培の普及が遅れている。

環境面では、日本の農家が節水や発電などの分野で世界のトップレベルにあることが分かった。太陽エネルギーを使った発電では、現時点で効率が非常に高いと言われているソーラーパネルが使われていた。先生の説明では、発電した電気が使い切れない場合は、電力会社に売ることもできるという。また、研究所で使っているお湯にも太陽エネ

ルギーが使われ、節水面でも農業ハウスのいたるところに節水のための改造が行われるなど、静岡県農林技術研究所では細かい所までさまざまな工夫がなされていた。

農産品の販売では、事業体を設けることで、中間業者によって農家の利益が損なわれるという問題が解消されていた。どのように栽培技術を普及させていくか、どのように経営するか、いかに農家の利益を確保するか等、中国も日本に学ぶところが多い。中国の農民の人口に占める比重は大きい。いかに彼らの利益を保障していくかが、中国が今後発展していく上での一つの重要な任務となる。

農業は国家の根本であり、国がどんなに発展したにしても、農業の発展が軽視されることはない。農業研究を真の意味でコスト削減や資源利用率の向上、環境保護と結びつけていくことが、たゆまぬ前進をしていく上での重要任務となる。この点については中国も再三強調し、改革を進め、外国の経験も学んでいるので、これからすべてが良くなっていくことを信じている。

感動創造企業——ヤマハ

首都師範大学学生代表

見学日時：2012年5月30日（水）

見学場所：静岡県磐田市新貝2500

見学概要：

5月30日午前11時30分、訪日団はヤマハ発動機株式会社本社を訪問した。まずヤマハ発動機株式会社モーターサイクル事業本部第3事業部の多田栄治営業部長から歓迎の挨拶があり、その後にヤマハの変遷、企業理念、会社概要、CSR等についての説明を受けた。

ヤマハ発動機株式会社は1955年(昭和30年)に創業した、モーターサイクル、スクーター、ディーゼルエンジン、汎用エンジン、発電機、自動車用エンジン、産業用ロボット等の製造、販売を一手に担う日本企業である。創業以来50年余り、モノ創りとサービスを通じて多様な価値の創造を追求している。現在の資本金は856億6600万円(2012年3月末現在)、従業員数は10000人、連結会社を合わせた総従業員数は54000人、連結子会社は113社(国内25社、海外88社)となっている。

ヤマハ発動機株式会社の「企業理念」は以下の3つの理念と指針から成る。①「企業目的」。人々の夢を知恵と情熱で実現し、常に世界の人々に新たな感動と豊かな生活を提供する。②「経営理念」。具体的には顧客の期待を超える価値の創造、従業員がヤマハで働くことを誇りに思える企業風土の実現、グローバルな社会的責任の遂行を掲げている。③「行動指針」。あらゆる変化に素早く対応し、失敗を恐れず、もう一段高い目標に挑戦し、最後までやり抜くことを全従業員に対して求めている。

会社の概況について学んだ後、社員の方たちと社員食堂で昼食を共にした。そのときのおしゃべりで同社の経営状況についてより深く理解することができた。

昼食後は2班に分かれ、バイクを製造する7号工場生産ラインの全工程を見学した。従業員が部品組立からバイクの完成まで一つもゆるがせにすることなく作業していた。中でも目を引いたのが無人の部品搬送車だ。それは各バイクの組立に必要な部品を積み、床に敷かれたレールの上を走っていた。案内係の人の話では、バイクの組立にはたくさんの複雑な部品が必要で、一度に何台分もの部品を作業員の傍に置くと、非常に探しづらく、破損の可能性も大きいということだったが、この搬送車を使えば、こうした問題が全て解消できる。しかもバイクは上下別々に組み立てられるので、部品を上下別々に置けば、使用する工具も自然とそれに合わせて配置され、作業効率が大幅にアップしたという。また部品の搬送車は音楽が流れるようになっていて、作業現場で作業員とぶつかることはないという。

バイクの製造現場の見学を終えて会議室に戻った。社員の方たちが質問に根気よく答えてくれた。最後に記念撮影をして今回のヤマハ発動機株式会社の訪問は終了した。

知っていますか？

1. 1955年、日本楽器製造株式会社(現ヤマハ株式会社)から分離し、ヤマハ発動機株式会社が成立。
2. ヤマハの企業目標は「感動を・ともに・創る」。
3. ヤマハ発動機株式会社は、世界で初めて電動アシスト自転車を販売した企業である。



感想：

これまでも日本の優良企業はどことも真面目で細部にまでこだわるというイメージを持っていたが、この数日の企業訪問を通じてその印象がより強くなった。ヤマハ発動機株式会社でもその細やかな心配りが特に印象に残った。例えば、工場見学の前に外で集合写真を撮ったが、短時間の見学を終えて工場を出ると、もう写真がプリントされていて、全員に配られた。また、1つの班が工場見学している間、もう1班が退屈しないようにと、展示室の新型バイクを見学し、体験できるように手配されていた。さらに最後の質疑応答の際には、管理部門だけでなく生産部門の責任者までが同席して学生のさまざまな質問に答えてくれた。

わずか数時間の訪問ではあったが、今回の感想をまとめると、「感銘」の2文字に尽きるような気がする。作業員の方たちが自らの智慧と努力で常に作業効率の向上を図っているという点に感銘を受けた。人をもてなす時のきめ細やかさにも感銘した。さらには代々社員に受け継がれて来たヤマハの精神に感銘し、「感動を・ともに・創る」という企業理念と目標に強い感銘を覚えた。感銘を生み出す企業、幸せを生む企業、それがヤマハ発動機だ。

至哉坤元、万物資生——資生堂鎌倉工場見学レポート

国際関係学院学生代表

見学日時：2012年5月31日（木曜日）9:00-11:00

見学場所：資生堂鎌倉工場

見学概要：

朝、訪日団一行は東京のホテルニューオータニから喜び勇んで車に乗り込み、鎌倉にある資生堂工場の見学へと出発した。資生堂は中国の消費者の間では高級な日本の化粧品ブランドで、おそらく団員の女子学生は皆今日の見学を楽しみにしていた。

時間どおりに工場に到着すると、工場敷地内にある建物に入り、工場見学の準備を開始した。これまでの見学とは違って、見学エリアに入る前に靴に付着したごみなどを工場内に持ちこまないように、靴カバーをつけなければならなかった。工場のこうした配慮は厳しく製品品質をコントロールする姿勢と消費者に対する責任を表すものだ。靴カバーをはいてぎこちない様子が見学が始まった。資生堂のブランドイメージがさらに高まったような気がする。

資生堂鎌倉工場の見学は工場の概略紹介、工場紹介のDVD放映、現場見学の3つの部分に分かれていた。まず担当者が資生堂の創業時の歴史やその後の変遷、鎌倉工場の概略について簡単に紹介してくれた。紹介を聞いて、資生堂が140年の歴史を持つ化粧品会社であることを知った。1872年に東京・銀座に創設された資生堂は、日本で初めての歯磨き粉を生産したり、今でも売れ筋の化粧水「オイデルミン」を開発したり、さらには数え切れないほどの化粧品の開発と販売という偉業を成し遂げてきた。今や資生堂の生産・販売ネットワークは世界中をカバーし、世界各国に工場を持つ。中国だけでも4つの化粧品工場(台湾地区を含む)がある。グローバル化時代に世界に向けて打って出て行く資生堂の姿勢に時代の潮流に乗ろうとする思いがよく表れていると思う。こうした姿勢こそが140年という長い時を経てもなお衰えることなく存在するための秘訣なのかもしれない。

担当者の説明を聞いた後、資生堂の製品生産に関するビデオを見た。ビデオの内容は製品の研究開発と生産の2つの部分に分かれていた。製品開発の紹介では、同社の肌に関する研究の取り組みが重点的に紹介されていた。資生堂の商品全てに顧客ニーズを真剣に研究し、常に努力して来た開発担当者の心血が注がれている。また、生産段階での衛生管理とハイレベルな生産基準がとても印象的だった。それぞれの製品は販売前に専門の検査員自らが試用することになっていた。検査員は仕事に支障が来さないように資格試験を受けるだけでなく、日焼けをしないようにするなど健康管理に気を配っていた。このビデオを見て、資生堂の製品はただ単に工場で生産されたものというレベルのものではなく、消費者をもっと美しくしたいという資生堂社員の願いの結晶なのだということが分かった。

化粧品の生産拠点である資生堂鎌倉工場の衛生面での要求の厳しさが特に印象に残った。靴カバーの他にも、つなぎの無塵衣と使い捨ての帽子を着け、さらには消毒液で手を洗い、掃除機で衣服の上の埃を吸い取り、最後にアルコールで手を消毒するという3段階の消毒ステップを経験した。もっともアルコールアレルギーがある場合は、アルコール消毒は免除されるということだった。現場見学前の準備はこれで終わりというわけではなく、消毒後も脱塵室と呼ばれる密閉された部屋に入り、加圧空気でもた埃を落として、やっと工場の現場に入ることができた。

作業現場に入ると、面白いことに気づいた。作業員のかぶっている帽子の色が赤、ピンク、黄色、白と違うのである。担当者によると、帽子の色によってそれぞれの担当が分かるようになっているという。赤は生産ラインのリーダー、ピンクはサブリーダー、黄色は設備担当、白は一般のライン作業員を表す。またこの日は見かけなかったが、現場全体の責任者を示す紫の帽子(1人のみ)もあるという。どの作業員も清潔な防塵服を着て真剣にラインの作業に取り組んでいた。各工程に数人の作業員が配置され、見学に来た私たちに全く影響されることもなく、ボトル詰めが終わった化粧水や乳液、口紅のパッキングという各工程を真剣にチェックしていた。資生堂鎌倉工場の設備は先進的で、生産量は海外工場に比べると少ないが、それでも1日に1000本以上の化粧品の生産が可能で、最大の4号タンクには1万本

分の美容液を入れられるという。鎌倉工場の製品は日本国内向けに販売されるものが中心のため、生産量はそれほど多くないが、3000種類以上の製品が製造できるほか、技術によっては機械でも熟練工のレベルに及ばないということで、工程の多くが手作業によって行われていた。生産ラインで自動でボトルに液体を注入する時、ノズルをボトルの底まで入れてから注ぎ始め、その後徐々にノズルの位置を上げながら一杯になるまで注いでいたが、これは注入過程で気泡が発生して品質に影響が出るのを防ぐための対策だった。こうした細かい所からも資生堂の品質に対する厳しい要求や消費者に対する敬意を感じることができた。

また、工場の屋上に天満宮と呼ばれる小さなお社があったのがとても印象に残った。作業員の説明によると、このお社はただの飾りではなく、新しい製品を開発する時に、開発や出荷が無事に終るように社員がここで祈るのだという。

現場見学が終わって会議室に戻ると、案内役の人から好きな健康飲料を1本ずつ選ぶように言われた。団員の中には日本語が読めない人もいたので、担当者がそれぞれの健康飲料について詳しく説明してくれた。選んで席に戻ると、それぞれの机の上に記念品として資生堂のスキンケア製品のギフトが置かれていた。ギフトの中身は男性、女性、既婚女性向けとそれぞれ違っていた。団員の座席まで気を配り、記録していたことを知り、非常に驚かされた。資生堂の成功とこうしたお客様に対する周到な気配りは不可分のものだったと思った。

知っていますか？

資生堂の名前の由来

「資生堂」の名称は儒家の経典「易経」の坤卦部分の「至哉坤元 万物资生(至れる哉(かな)坤元(こんげん) 万物资(と)りて 生(しょう)ず)」に由来する。これは新たな命を育む大地の恩恵を賛美したものだ。この言葉を社名の由来にしたことは、常に新しい価値を発見、創造していくことを目指す資生堂の理念を十分に表しているが、この理念は企業の根本理念として今も機能している。資生堂は1872年に創業して以来、140年の歴史がある。

資生堂鎌倉工場について

資生堂鎌倉工場は1959年にアジア初の化粧品製造工場として設立された。当時はわずか100人余りだった従業員が、現在では900人超を数えるまでになっている。鎌倉工場は3つに分かれ、化粧品、乳液、サンプルなど約3000種類以上の製品を製造している。工場内にはこの他に食堂や事務棟、運動場などの施設がある。日本国内で販売されている資生堂ブランドの口紅の大部分は鎌倉工場で作られている。

資生堂のブランドについて

高級ブランド: Cle de Peau (CDP)、IPSA (イプサ)。二番手ブランド: Ettusais (エテュセ)、CARITA カリタ、Decleor (デクレオール)。基本ブランド: Shiseido Fitit、Asplir (アスプリール)、DeLuxe、ff、SELFIT (セルフイット)、Whitia (ホワイトティア)、FT Shiseido、Pure&Mild。コスメブランド: Maquillage。男用ブランド: UNO、JS。中国限定: AUPRES (欧珀莱)、Za (ジーエー)、URARA (悠莱)。香水ブランド: Jean Paul Gaultier、ISSEY MIYAKE。スキンケアブランド: Shiseido Professional。

資生堂製品の多くは若者向けである。中国で比較的購入しやすいものに資生堂、AUPRES (欧珀莱)、Za (ジーエー)、URARA (悠莱)、Pure&Mild (泊美)、UNOなどがある。

乳液について

一般的に化粧品は新鮮なものが効果が高いと考えられているが、乳液はそうではない。資生堂の担当者によると、生産したばかりの乳液は粘度が不安定で、香料も添加されていないため、製造後7-10日たち粘度が安定し、香料を加えたものが最もよいという。

感想：

資生堂鎌倉工場を見学して、企業の発展が普段からのイノベーション意識や人間本位の考え方と不可分であることをあらためて認識した。資生堂が140年の年月を生きのび、世界ランキング5位の化粧品メーカーになったのも、高い品質管理基準と常に技術革新を目指す経営理念と切っても切れない関係にある。資生堂の化粧品は単なる「モノ」というだけでなく、そこには資生堂の社員が消費者を満足させるためにして来た努力とサービス意識が凝縮している。



消費者の視点や立場に立ってニーズを満たして初めて消費者から認められ、人気を集めるようになる。消費者のニーズの違いを絶えず理解し、こうしたニーズを満たすために研究開発に励み、絶えず技術革新を行っていく企業だけが消費者の心をしっかりとつかむことができる。日本企業の経営理念がまた訪日団一行の心を打った。企業理念は経営の土台であり、資生堂の成功は、創業当初に打ち立てた経営理念が、その後の発展の基礎になったことと大いに関係がある。

見学を振り返ってみると、資生堂鎌倉工場にあった「良い品を、良い人で、お客さまの喜びを、私たちの喜びに」という標語がとても印象的だった。現在のような企業間の競争がますます激化しているグローバル化時代においては、消費者のニーズを真に満たすことのできる企業だけが生き残ることができるのだと思う。資生堂の「至哉坤元 万物資生」という創業理念が今後も引き継がれ、消費者のために奇跡を起こし続け、美の伝説を作り続けてほしいと思う。

日本の大型客船と船の見てきた歴史

中国伝媒大学学生代表

見学日時：2012年5月31日（木）14:30-17:00

見学場所：日本郵船「氷川丸」日本郵船歴史博物館（横浜市中区山下町山下埠頭公園）

見学概要：

訪日4日目、美しい港町・横浜にある有名な日本郵船の氷川丸と日本郵船歴史博物館を見学した。当時は日本一の豪華客船とも言われた氷川丸は山下公園の埠頭に停泊していた。海外渡航は汽船しか考えられなかった時代、氷川丸は乗客のみならず、人々の夢と希望を乗せて太平洋を航海していた。しかし、氷川丸はその後数奇な運命をたどり、歴史の波に翻弄されることになる。1930年から1960年までの間、氷川丸は太平洋の横浜・北米シアトル間を往復していたが、1961年にその輝かしい航海の日々に終止符を打ち、観光施設として山下公園に係留されることになった。この半世紀以上前の大型客船に足を踏み入れるや、映画「タイタニック」の1シーンのような既視感を覚えた。客船の歴史を紹介したビデオを見た後、機関室、操舵室、船長室、一般客室、チャップリンも宿泊したという一等客室を見学した。展示室「シアトル航路の旅」では、たくさんのオリジナル資料や興味深いエピソード、一等客室の乗客の船上生活の様子が展示され、まるでタイムマシンに乗ってかつての華やかな日々を追体験しているような気分になった。氷川丸から数百メートルの所——上海のバンドに似た西洋建築の建ち並ぶ場所に日本郵船のビルがあった。その1階に客船の歴史を紹介する郵船博物館があり、明治以降、人・物・文化を乗せて世界各地を航海していた船舶の歴史が展示されていた。そこで語られているのは、まさに島国・日本の海運の歴史そのものだった。

写真資料



右：「太平洋の女王」と称えられた豪華客船「氷川丸」
左上：「氷川丸」の歴史紹介ビデオを見る船長と学生
左下：「氷川丸」の前で記念写真を撮る中国伝媒大学の学生



右：「日本郵船歴史博物館」を熱心に見学する学生
左：1993年12月にオープンした「日本郵船歴史資料館」は、2003年「日本郵船歴史博物館」と改称。ギリシャコロント式の円柱が16本並ぶ優美でクラシックな建物、横浜郵船ビルに移転。

知っていますか？

1. 「氷川」は地質用語ではない。

氷川は中国語の「氷川(bingchuan)」という地質用語とは別物である。日本各地にある神社の名称であり、日本人の一般的な姓の1つである。

2. 「氷川丸」の輝かしい歴史

明治維新後、日本政府の支援を受けて「プレジデント型」5隻(計14000トン)をはじめとする10隻(計2万トン)の郵船が、東西両岸(シアトル航路)に就航することになる。第一次世界大戦後は太平洋航路が大打撃を受けたこともあり、日本政府の後押しを受けた日本郵船が17000トン、速力20ノットの高速客船3隻と3隻合計12000総トン、速力18ノットの高速貨客船を建造し、サンフランシスコとシアトル航路にこれを投入。一気に太平洋路線での巻き返しを図った。当時シアトル航路を運航した計12000総トンの貨客船3隻のうち、最初の1隻が「氷川丸」である。昭和5年(1930年)に横浜の三菱造船所で竣工した全長163m、総トン数12000トンの大型豪華客船「氷川丸」は、かつて太平洋を横断し、日本と北米を行き来して「太平洋の女王」と称えられた。

3. 政府出資による海運会社・日本郵船の歴史

1853年、アメリカ海軍のペリー提督が船隊を率いて来航し、日本の鎖国を破った。当時旧式の帆船しかなかった日本に蒸気船に対抗する術はなく、開国後の一時期、日本の海運事業は外国企業によって独占されていた。こうした一連の流れは、日本にとって屈辱的だったに違いない。

そんな中、日本政府の資金援助を受け、日本に海運会社が誕生する。まさにどん底からのスタートだった。しかしその海運会社は低価格戦略で競合他社を瞬く間に蹴落とし、横浜・上海路線を手中に収め、日本の海上貿易の覇者となった。その後、日本政府は競争原理を取り入れ、海運会社をもう1社つくったが、両社とも値下げ競争に走り、倒産の危機に瀕する結果になった。そこで1885年、日本政府はこの2社を合併して日本郵船会社とした。

4. 日本郵船の一つの境地

1930年代、日本国内における紡績業の急成長と膨大な原料需要を受けて、日本郵船は欧州、アジア、オセアニア、北米に数多くの航路を開設し、一躍世界屈指の海運会社となった。しかしここでまたもや第二次世界大戦の悪夢が郵船会社を襲う。多くの船が軍部に徴用され、敗戦時には船舶185隻と船員5312名を失い、完全なる低迷期に突入したが、その後に勃発した朝鮮戦争によって日本郵船によく成長の契機が訪れる。起死回生を図る同社は、1951年から52年にかけて次々とかつての路線を復活させていった。

1955年以降、日本の高度経済成長により日本郵船は第二の春を迎えることになる。規模の拡大を図ると同時に、顧客ニーズに応じて特殊貨物を輸送する専用船の建造にも力を入れ、先端技術を海運事業に導入して世界経済の発展を促していった。日本初の大型コンテナ船を建造し、経済的で便利かつスピーディな輸送方式を以って顧客にサービスを提供していったのもその一例である。また、日本郵船はさまざまな手法を幅広く採り入れて財務の多角化を図り、円高リスクを上手に回避して世界的競争力を維持しつつ、コスト削減に努めると同時に、顧客の利益拡大にも貢献している。

感想：

今回の氷川丸と日本郵船歴史博物館の見学で最も強く印象に残ったものに次の2つがある。

- (1) 時代と共に変わっていく精神。幾多の歴史の試練に耐えてきた氷川丸と日本郵船だが、そこに時代遅れの感はまったくない。それは両者が時代の趨勢に乗り遅れることなく状況に適応し、時代とともに変貌を遂げ、自身の役割と立場を変えていくことで、時代のニーズに適応して来たからだ。氷川丸は豪華客船から病院船へと変わり、今では娯楽施設になっているが、日本郵船も同じようにその時々々のニーズに合わせて異なる経営目標を掲げて来た。まさにそうして来たからこそ、日本郵船は時代に取り残されることなく、永遠の輝きを放ちながら常に社会に貢献することができたのだと思う。

(2) 伝承と保存の理念。明治維新後に日本政府の後押しで建造され、「太平洋の女王」と称えられた大型客船・氷川丸は、二度の世界大戦にも耐え保存されてきた。氷川丸は各時代により豪華客船や傷病者輸送など、さまざまな役割が与えられて来た。人々はその役割の中で同船が果たして来た目に見える貢献だけでなく、歴史の検証者としての歴史的・文化的価値にも気づき相応の取り組みを行ってきた。歴史的な文化財の保存や復元、大型客船の定期メンテナンス、客船内での詳細な歴史紹介が認められ、2003年に横浜市から「有形文化財」に指定を受けることになる。大事に保存されて来た巨大な船体を見るにつけ、中国では多くの歴史的・文化的伝統が忘れ去られつつある一方、日本ではそれらが受け継がれ、輝きを増している事実を考えずにはいられない。中国はこの点をよく考えてみる必要があるように思う。残念ながら、我が校(中国伝媒大学)の訪日メンバーの中にはこの分野を専攻する学生はいなかったが、専攻でなくても、じっくりと観察・体験すれば、誰でも何かを掴みとり、自分の物にすることはできると思った。

鉄道民営化がもたらした経済的飛躍

北京交通大学学生代表

見学日時：2012年6月1日(金)13:30-15:30

見学場所：JR東日本本社

見学概要：



JR職員の丹念な説明

13時、JR東日本本社に到着。会議室でJR東日本旅客鉄道株式会社の温かい歓迎を受けた。まず、日中鉄道友好促進協会事務長・大沼富昭氏から挨拶と中国の大学生の訪問を歓迎する言葉があった。続いて、JR職員による日本の鉄道史、JR東日本の特徴についての詳細な紹介、及び日本の鉄道業界の現状と将来的に新幹線が遭遇と思われる問題についての説明を受けた。最後に鉄道の安全性や民営化等の問題についての質疑応答が行われた。

知っていますか？

Q: 日本の鉄道のフレームワークは？

A: 「1987年に国有鉄道が分割民営化され、JR北海道、JR西日本、JR東日本、JR四国、JR東海、JR九州及びJR貨物という旅客鉄道会社6社と貨物鉄道会社1社に分かれた。各旅客鉄道会社がエリアごとに日本の鉄道ネットワークと駅を管理している。

Q: 鉄道民営化によってどのような経済効果が生じたか？

A: 国鉄の分割は何年も続いていた赤字解消の必要に迫られたものだった。民営化後、日本の鉄道は徐々に元気を

取り戻していった。JR東日本の例を挙げると、営業収入25373億円、純利益762億円となっている。企業規模も著しく拡大し、59650人の職員を擁するまでになっている。

Q: 新幹線はどのように安全運行を確保しているのか？

A: JR東日本旅客鉄道株式会社は純収入の40%を安全運行のために使っている。自然災害防除システムを構築することにより、地震多発国の日本で乗客の生命と安全を保証している。

Q: 民営化後はどのように今まで以上の価値を創造しているのか？

A: JR東日本の目下の収益の30%は運輸以外の事業から得ている(ショッピング・レジャー一体型の大型駅の建設や新幹線を使った広告等)。サービス関連業務の収益を総収益の40%まで引き上げることを目標に旅客輸送以外の収益を年々増やしている。また、旅行商品の宣伝にも力を入れ、中心都市の商圈を開発することで周辺都市の観光経済を牽引し、乗車率の向上を図っている。

感想：

JR東日本の訪問で国際的かつ先進的な鉄道管理についての考え方を知ることができた。民営化によって日本の鉄道事業がより活力と経済価値のあるものになっている。ビジネスモデルに関しては、駅や周辺エリアをしっかりと開発することは鉄道の発展における新しい発想であり、従来の鉄道事業を考え直す機会になった。日本の鉄道会社の安全運行のための巨額の投資は、誰にとっても安心であり、やさしさと安らぎになる。鉄道事業を専門的サービスの向上と旅客への気配りに集中させている点が、JR東日本の見学で最も印象に残った点だった。また、日本の鉄道史を見ると、環境保護にも注意が向けられている。車輛の開発と製造では、運転時騒音の低減や使用エネルギーの削減が継続的に図られ、環境・省エネ素材が大量に使われている。

日本の鉄道会社が黒字転換したことの日本経済全体への貢献はもっと評価されてもいいように思う。安全で速く、便利な鉄道システムこそが日本経済が急成長を支えたベースになっている。中国の高速鉄道は今まさに急成長の真ただ中にある。技術面では既に先進的レベルに達しているが、管理していく上での考え方や経営ビジョンは旧態依然のままである。将来的に中日両国が鉄道交通分野で協力することは、両国の国民にとっても良いことだと思う。



北京交通大学の学生と大沼富昭さんの記念撮影

国際化総合商社の企業理念の秘密を探る

北京交通大学学生代表

見学日時：2012年6月1日（金）16:00-20:00

見学場所：三菱商事株式会社本社 丸の内パークビル28階W04会議室 東洋文庫

見学概要：



三菱商事を見学

16:00-17:30、三菱商事本社で商社の概要についての説明を受けた。まず中原副社長から挨拶と中国大学生の訪問に対する歓迎の言葉があり、続いて朱丹団長が挨拶をした。その後、会社の基本業務と発展の状況についてのビデオを視聴した後、企画業務部の西原中国室長からは会社の概要、小売事業部の今田部長からは三菱商事の小売業務についての説明があり、最後に企業理念や発展戦略についての質疑応答があった。

18:00-20:00、三菱グループの私設図書館として始まった東洋文庫を見学し、三菱商事の社員たちと中日両国の企業と文化の違いについて意見交換をした。



東洋文庫

知っていますか？

私たちが見学した東洋文庫は日本最大(世界第五位)のアジア研究のための図書館で、日本の中国学研究のための三大拠点の一つに数えられている。

東洋分庫の前身は英国人のモリソンが創設したモリソン文庫だ。モリソンは1897年～1917年の20年をかけて中国の図書文献24,000冊余、地図や中国書画1,000点余を収集した。1917年に三菱財閥の第三代当主・岩崎久弥がモリソン文庫を買い取り、これをベースに岩崎文庫などのコレクションを充実させていった。1983年4月の時点で中国、日本、朝鮮、モンゴル、シベリア、中央アジア、西アジア、エジプト、インド、東南アジアなどの国々と地域の蔵書約700,000冊を数えるまでになった。

東洋文庫は日本の学术界においてはアジア文献の宝庫と称され、中国と中国文化を主な対象とする専門図書館兼研究所である。所蔵する中国の珍籍には中国地方誌や叢書約4,000部、中国方言辞典500冊余、各種大藏経やチベットの文献3,100点がある。なお、1961年にはユネスコの要請を受けて東アジア文化研究センターが附置されている。



三菱商事の関係者と記念撮影

感想：

三菱商事の見学と交流を通して、同社が国内外に200余りの出先機関を擁し、500社以上の「連結」子会社と共にビジネスを展開している国際的な総合商社であることを知った。三菱商事が扱う分野はエネルギー、機械、化学工業から食品加工や小売業まで多岐に及ぶ。総合商社としての三菱商事の大きさに溜め息が出た。三菱商事の成長はその企業理念と深い関係がある。三菱商事のように常に自らの理念を貫き、企業文化の発揚を心がけた企業だけが、百年の風雪に耐えてなお活力に満ちた成長を続けられるのだと思った。三菱商事が長く継承する「所期奉公、処事光明、立業貿易」という三綱領は、今日の輝かしい業績を誇る三菱商事の無形の財産になっている。三菱商事の優れた経営は、以下のいくつかの面で中国企業も参考にすべき所があるように思う。①企業理念を常に継承・発揚して企業文化を創造する。高度に統一された思想と目標があって初めてそれぞれの積極性と創造性を最大限に発揮することができる。企業もそうすることで継承され、長い歴史の中でその存在感を示すことができる。②常に社会や国に貢献していくことが企業としての究極の成長の方向性である。三菱商事だけでなく、多くの成功した日本のグローバル企業はいずれも社会に対する貢献を企業の発展戦略の中に盛り込み、社会から得た利益を公益事業という形で社会に還元している。これこそが企業が歳月を経ても衰えることなく、顧客の信頼を勝ち得ている理由でもある。③長期計画と合理的分業。長期的視野を持った企業こそが利益をあげることができ、それにより大きな成長の余地を持つことになる。具体的には企業の合理的な部門配置と明確な分業が目標実現のための基礎となる。

独立の精神と自由の思想—早稲田大学

首都師範大学学生代表

見学日時：2012年6月4日（月）14:30-19:30

見学場所：早稲田大学

見学概要：

「早大」という略称を持つ早稲田大学は、慶応大学と共に「私学の雄」と並び称される私立大学で、東京都新宿区に本部を置いている。1882年に大隈重信が設立した東京専門学校を前身とし、1901年に早稲田大学と改称したときに専門部と大学部を設置。その後1949年の学制改革に伴い新制大学となり、2004年には国際教養学部が新設されている。同校は日本の四大私学「早慶同立」の一角をなし、鎌田薫が現総長を務める。



早稲田大学はアジアで最もグローバル化された大学の一つである。日本最先端の図書館を有し、幅広い教育と「入学

するのは易しいが卒業は厳しい」という校風が特徴で、学生の総合力の育成に重点を置いている。伝統的に政治経済等の文系が強く、企業の各大学OBに関する満足度調査では毎年首位にランキングされている。また、アメリカのクリントン元大統領、韓国の金泳三元大統領、中国の江沢民前国家主席、胡錦涛現国家主席も訪日の際に、講演場所として早稲田大学を選んでいる。また、同校は政界に大きな影響力を持っているだけでなく、科学技術分野でも国際的に名を馳せている。1922年11月にはアインシュタインも早稲田大学を訪れ、キャンパス中央に位置する大隈銅像の前で講演を行っている。

早稲田大学、この田園の香りが色濃く漂う校名を冠する大学は日本有数の名門大学である。1882年、「学問の独立」宣言とともに早稲田大学の前身である東京専門学校が東京郊外の田園風景の中に誕生した。そして今、早稲田大学は130年の荒波を乗り越え、完全な総合大学へとその姿を変えている。早稲田大学には都心北西部の新宿の近くに位置する西早稲田キャンパス(本部)をはじめ戸山キャンパス、北九州キャンパス、大久保キャンパス、30キロ郊外にある所沢キャンパスの5つのキャンパスがある。その美しいキャンパスにはビルが立ち並び、教育やスポーツのための施設が完備されている。創設者の大隈重信は「学問の独立」、「学問の活用」、「模範国民の造就」を建学の精神に掲げ、学問の思索と独創的な研鑽を提唱し、知識を活かして世界で活躍のできる人材の育成を目指した。また、当時の大学で実践されていた外国語での授業に反対し、自国語による教学を貫いた。

早稲田大学には学部と研究科があり、政治経済学部、法学部、商学部、社会科学部、教育学部、文学部、文化構想学部、基幹理工学部、創造理工学部、先進理工学部、人類科学部、運動科学部、国際教養学部の13学部が設置されている。研究科には政治学、経済学、法学、文学、商学、社会科学、理工学、教育学等の20の研究科が置かれている。更に附属図書館、演劇博物館、産業経営研究所、比較法学研究所、システム科学研究所、材料技術研究所、大学史資料センター、環境保全センター、コンピュータ研究室等の組織に加え、高等学校、専門学校、実業学校、中学高校等の附属学校がある。

日本有数の私学としての早稲田大学の校風は自由ではあるが散漫ではない。政治やマスコミをはじめとする多くの業界で活躍する人材を輩出し、今やその影響力は国内にとどまらず、海外にも名を馳せる世界の名門と呼ぶにふさわしい大学である。

松本楼の見学を終え、早稲田大学に向かった。優れた私立大学というだけあり、勉学の雰囲気には溢れていた。案

内役の学生について行くと、校門も学校名を刻んだ銘板も見ることなく、いつの間にかキャンパスの中にいた。美しく気持ちのいいキャンパスを歩き、早大を象徴する建物・大隈講堂とヨーロッパ的風格の漂う図書館を見学した。早稲田の学習環境と学生の日常生活に直接触れることができた。その後、先生の説明で早稲田大学に関する理解を更に深め、同校が「自由」を何よりも大事にしていることを知った。続いて「10年後の夢」と「若者の就職を促すには？」という2つのテーマについて、早稲田の学生と討論することになった。私たちの班は「10年後の夢」というテーマを選んだが、誰もが積極的に自分の考えを述べ、白熱した議論が行われた。最後に各班がそれぞれ議論の成果を発表した。その後は学生たちと夕食を共にして交流を深めた。



知っていますか？

1. 校名の由来は？

早稲田大学は1882年10月21日、「東京専門学校」という名で設立された。当初は早稲田校を「早稲田学校」、戸塚校を「戸塚学校」と言っていたが、1892年に「早稲田学校」と呼ばれるようになる。1902年9月2日、学制改革により「早稲田大学」として承認される。

2. 校章の由来は？



学校設立当初、制服に校章のような模様が刺繍されていたが、そのはっきりとした由来は分からない。創立20周年を迎えるに当たり、その模様が正式な校章とされたが、当時の形は少し丸みを帯びていた。それが4年後に改められ、稲穂の中心に「大学」の二文字を置く形になった。100周年を機に「大学」の字体、リボン、穂の数が統一され、現在の校章が完成した。穂の数19個あるのは、創立年の1882年の数字を足し算すると「19」になるからという説もあるが、さだかではない。

3. 校歌を歌うときの動作は？

左手を腰に当て、右手を高く上げて振る。

4. 早稲田の蔵書数は？

合計500万冊。うち図書館が250万冊を所蔵し、残りの250万冊は13の学部それぞれに置かれている。

5. 図書館の階段に掛けられた1991年の平山郁夫作「熊野路・古道」は、「学問の道」を表していると言われている。そこに描かれた道は、どこから見てもまっすぐ観る者の方に伸びているように見えるという不思議な絵である。

6. 現在の在校生は57000人、教職員数6000人、年間の諸経費は1000億円で、中国元に換算すると、1日当たり2000万人民币元かかることになる。その莫大な資金の多くは学費でまかなわれている。学費は文系で年間約100万円、理系では約150万円。国の補助金はわずか100億円で経費の15%を占めるのみとなっている。

7. 早稲田で一番優秀な学生は入学試験に受かっても入学しない。次に優秀な学生は中途退学する。三番目に優秀な学生は4年で卒業する。最も出来の悪い学生が卒業後も大学に残る(案内係の先生のジョーク)。

8. 自由を尊ぶ早稲田では、招聘した教員には終身雇用を採用し、制限も設けていない。発表する論文の数や研究テーマについても特に規定はない。



感想：

早稲田大学の基本理念である「学問に国境なし」と総長の提唱する「自由独立の精神を持つ国民の育成」が早稲田の「自由」の精神を体現している。早稲田は自身の理念を貫き、政界、文学界、マスコミ等、国のあらゆる分野に優秀な人材を輩出して来た。今回は短い訪問ではあったが、村上春樹ら優秀な人材を育んだこの肥沃な学問のための土壌の美しさとその背後にある豊かな文化を十分に実感することができた。早稲田の「自由」の精神を理解し、それを実感することは、学生のイノベーション的思考を育てる上で非常に有効であるように思う。そこで学ぶ学生は「自由」な雰囲気感に感化され、3000もの学生サークルを通じて、物事についてよく考え、臨機応変に対応できる人材に育っていくに違いない。これこそが中国の学生に欠けている点であり、それが柔軟性やイノベーション能力に欠け、物事への対応力の低さに繋がっているような気がする。

また、早稲田大学に学ぶべき所は多い。今、早稲田大学では学費援助の仕組みづくりと学習環境の整備が進められ、知識欲旺盛な学生の入学を待っている。現総長がこう言っている。「平民が大学で学んだ後、平民の中へ戻り、知識と思想の火種を広く平民の中に播き、国民の模範となり、人と社会、国家に貢献する。それこそが早稲田の追い求める高等教育の真義である」。早稲田大学はこれからも教旨を受け継ぎ、その理念を守り、その真義を貫き、日本ひいては世界に多くの優秀な人材を輩出していくものと信じている。

三菱東京UFJ銀行

国際関係学院学生代表

見学日時：2012年6月5日（火）10:00-13:00

見学場所：三菱東京UFJ銀行 東京都千代田区丸ノ内2-7-3東京ビル

見学概要：

見学する前からインターネットなどによって、三菱東京UFJ銀行が日本三大銀行の一つとして日本の金融界のフラッグシップ的存在であり、日本の金融再編後に誕生した三菱UFJフィナンシャル・グループ(MUFG)の中核であることは知っていた。創立以来「Quality for You」、即ち「すべては顧客のため、すべてはサービス向上のため」という企業理念を貫いている。

6月5日午前、訪日団一行は三菱東京UFJ銀行本店を見学した。窓口ロビーと金庫の見学、銀行の概要説明、ディーリングルームの説明、昼食会が予定されていてとても充実した時間を過ごした。三菱東京UFJ銀行の人からビジターバッジが配られ、まず本店の窓口ロビーに案内された。見学を通じて三菱東京UFJ銀行が一般預金・貸付業務、証券、信託、外国為替を網羅した総合銀行だということが分かった。営業ロビーを見学した後に金庫に案内された。そもそも金庫とは銀行がお金を保管する場所だとばかり思っていたが、三菱東京UFJ銀行の言う金庫は顧客の財産を守るための貸し金庫だということが後で分かった。案内係の説明によると、一番小さな金庫の年間賃貸料は2万円で、先進的なセキュリティ設備が備えられ、非常に安全だということだった。

次に会議室に通された。まず三菱東京UFJ銀行常務取締役から大学生訪日団歓迎の挨拶と三菱東京UFJ銀行の事業についての簡単な説明、私たち大学生の今後に対する期待などがあった。続いて職員が三菱UFJフィナンシャル・グループの実力、業績、「5つの強み」、BTMUの中国戦略を主な内容とする銀行についての大きな説明を行った。説明を聞いて、三菱東京UFJ銀行が日本の国内顧客を中心に約4,000万の個人口座と50万社の法人顧客を擁し、40以上の国に520ヵ所余りの拠点があり、日本一の海外ネットワークを持っていることが分かった。三菱東京UFJ銀行の最終目標は世界の顧客に認められた世界一流の銀行になることだ。

次に別棟にあるディーリングルームを見学した。三菱東京UFJ銀行マーケット部の中国人職員が、銀行全体とマーケット部の組織構造やマーケット部の役割、商品について詳しく説明してくれた。会議室のブラインド越しに大量のコンピュータディスプレイとそこで忙しそうに働いているオペレーターたちの様子を見ることができた。

ディーリングルームの見学を終えると、また会議室に戻り、職員との昼食会となった。昼食を摂りながら、銀行の業務について詳しく尋ねたり、入社するときの要件や金融知識について教えてもらったりと、職員の人たちと細かな話をすることができた。1時間近くの交流は大いに得るところがあった。

知っていますか？

- 三菱東京UFJ銀行は十分に顧客を信頼しているので、顧客が金庫に入って物品を預ける時の検査はない。つまりどんな物でも気軽に預けることができる。今の所、本店で事故が発生したことは一度もない。
- 日本の銀行窓口には銀行員と顧客の間には防弾ガラスがなく、直接話ができる。
- 三菱東京UFJ銀行ではサンドイッチを食べながらの会議が日常的に行われている。
- 三菱東京UFJ銀行は職員に非常に良い教育訓練の機会を提供している。本店では現在何人もの中国人職員が研修または正式業務に就いている。
- 三菱UFJフィナンシャル・グループは4つの銀行が合併してできたもので、1996年に三菱銀行と東京銀行が合併して東京三菱銀行となり、2006年には2002年に三和銀行と東海銀行が合併してできたUFJ銀行を吸収合併している。

- 土地私有制の日本では、銀行の敷地内での写真撮影が禁止されている。写真を撮ろうと思えば道路から撮るしかない。



感想：

日本のサービス業は5つ星級だと言わざるを得ない。銀行に足を踏み入れるや、数え切れないほどの心のこもった笑顔とうやうやしいお辞儀で迎えられる。職業的にそうしているのかもしれないが、客として尊敬されているという感覚が心地良かった。これは窓口と金庫の管理にも反映されていた。顧客を十分に信頼し、顧客のプライバシーを守ることが三菱東京UFJ銀行の大方針である。防弾ガラスで遮られることも煩わしい検査もなく、銀行と顧客の間には誠意と信頼の裏付けがあった。このように誠意を以って顧客に対応する銀行であれば、消費者は自分のお金を安心して預けることができるだろう。顧客との間に信頼があるからこそ、三菱東京UFJ銀行は経済危機の嵐に翻弄されることなく、国内外の顧客の好評を博しているのだと思う。

新エネルギーの理念が開く新しい暮らし

中国伝媒大学学生代表

見学日時：2012年6月6日（水） 09：00-10：30

見学場所：ホテルニューオータニ（東京都千代田区紀尾井町4-1）

見学概要：

ホテルニューオータニのエコ設備見学は、ゴミの分別とリサイクル工程からスタートした。山本さんは1999年以前の焼却費と非効率的な点について説明した後、現在の整備された環境保護システムに話を戻し、私たちの環境保護という理念そのものに対する基本的な理解を促した。

ゴミの分別と処理の見学では、厨房の残飯や野菜クズ等の廃棄物が130度の高温蒸気で汚染のない有機肥料や飼料に生まれ変わり、最終的には農家の作物等の栽培に利用されることを知った。

次に、厨房の原水と廃水再利用の工程を見学した。処理の済んだ廃水には全く臭いがなかった。まず沈殿部分を蛋白質の原料や肥料にし、次に上澄水を取り出して蒸留処理を行って中水とする。汚水を最大限に生かし、微生物で分解濾過して中水を作り、それをトイレや植物の灌水に再利用するという環境保護的手法がとても新鮮に思えた。

また、ホテルの給水システムには木製の水槽が使われていた。この木材固有の抗菌作用も水質浄化に役立っているという。

省エネ発電工程では、現在3基ある大型発電設備のほとんどに天然ガスとオイルタービンが採用され、発電の際に生じる排気や廃水も暖房の熱源や空調の冷却に使ってコスト削減が図られていた。

最後にローズガーデンに行った。屋外で栽培されている多種多様なバラが、そば降る小雨の中でひときわ美しく咲いていた。新郎新婦が満開のバラの中で記念写真が撮れるようにと、造花を使って上手に飾り付けがしてあった。



知っていますか？

ホテルニューオータニは「ハイブリッドホテル」という理念の下、環境保護活動の計画とその推進に取り組んでいる。環境保護と快適性を第一に考え、両者を有機的に組み合わせることで様々な環境保護対策を積極的に採用している。循環利用を実現するために、地下のエコ設備がすべて繋がっていることを今回の見学で知った。早い時期からこうした設計に取り組んできたこともあり、現在のホテルニューオータニの環境保護システムは完璧なものとなり、当初の無計画な設計が後の建設の障害になるというような事態にはならず済んでいる。山本さんの話では、こうした優れた

設計が省エネと建設コストの削減に貢献しているという。

日本は自然環境による地震が多い。そのため設備の多くに耐震構造が施されている。阪神大震災級の地震にも耐え得るというホテルの建物は、建築的な面から見ても非常に先進的だ。どのように地震を克服していくかという話になったとき、山本さんが笑いながら「日本は土地が貧しく、資源も乏しい。だからこそ、こうして多くのものを循環利用しているのです」と言っていた。また「民族の気質と発展は自然環境と密接に関係している」という山本さんの言葉が印象に残った。

ふと、小さな事に気づいた。設備の置かれている狭い通路を通るときに、通行者が転んで怪我をしないように、ラックの突き出た部分が全てペットボトルで覆われていた。地下のエコ設備にすらこれほど細やかな気配りのできるホテルなのだから、他の施設やカウンターのサービスもきっと素晴らしいだろう。これも中国の多くのホテルに欠けていることの一つではないだろうか。



感想：

ホテルニューオータニの循環利用、省エネ、環境保護に対する考え尽くされた取り組みには、感動と尊敬の念さえ覚えた。

一方、中国に目を向けると、近年、環境を犠牲に経済の高度成長を優先して来たことで、環境問題が深刻さを増している。今回私たちは学生として見学・実習という形で環境保護の手法について学んだ。今後中国も環境問題への関心が高まり、こうしたエコ施設や理念を活用して環境保護への取り組みを強化し、政府の監督と支援によって企業の環境保護意識を高め、そのための対策が強化されていくものと確信している。

発展途上にある中国は、経済発展もまだ始まったばかりで、まだ先進国に劣る点が多々ある。そうした問題を客観的に見つめ、自国の現状を理解し、現実的に即して一刻も早く環境友好型社会を築くことが求められている。

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第10回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日付：5月28日(月) 1日目

大学名：中国農業大学

氏名：尹肖貽

今日は訪日1日目、はずむ気持ちと期待は言葉では言い表されない。初めての海外、初めて飛行機に乗り、初めて日本を訪問し、初めて日本料理を食べた。今日は数え切れないほどの「初めて」を経験した。今、夜の11時、大阪城を臨む窓の外を列車が走りぬけて行った。まるで私の気持ちが伝染したように快活に力強く、遠くを目指して……。

飛行機の中は言うに及ばず、日本の第一印象はその「静謐さ」だった。誰もが「静謐」というルールに則って行動しているように思えた。飛行機の中の行き届いたサービスも旅を快適なものにした。

日本に着くと、愉快的な2人が待っていた。呂純玲さんと渡辺光男さんだ。呂さんは自分も中国出身で、「公務のために自費で」日本に来たと言い、渡辺さんは「裸で生まれて来た男」だと冗談たつぷりに自己紹介した。2人が代表団の食事や宿泊、安全を担当するというのだが、とてもよく考えられていると思った。

今日はそれほど重要な日程はなかったが、早めに着いたので、大阪で一番賑やかな商店街を見て歩くことになった。1.6kmの商店街は大阪及び日本で最長の商店街だということだったが、その距離の長さよりも精緻で清潔な環境が印象的だった。まさに日本随一の商店街という名に相応しいものだった。流行りのブティックや古い雑貨店、面白そうなゲームセンターに美味しいレストランと、多様な街がそれらの全てを包み込んでいた。目を惹く店の看板、店内のきれいなレイアウト、細かい所にまで拘る日本人のすごさを感じた。

日本は大きな国ではないが、世界を驚かすような力がある。日本には興味があるし、尊敬もしている。今日飛行機が着陸した空港は1997年に12年の時間を費やして竣工したという。空港建設のために山を一つつぶし、数キロ平米の海を埋め立てた。これからの数日間、日本のパワーと日本人の信念のようなものを感じてみたいと思う。

明日は友だちと早起きをして大阪城の石垣を見に行くことにしている。大阪城は天下人の豊臣秀吉が16世紀に建造した城だ。窓からその輪郭が見える。大阪は歴史と現代が融合した街だ。明日のために日記はこのへんにして寝るとしよう。

5月29日 朝

朝、大阪城に行った。ビデオをたくさん撮った。主に景色を撮った。みんなずいぶん早起きしていた。私は少し遅れて起きたが、大阪城にはみんなと一緒に行けた。朝の空気は北京よりもずっときれいだった。

日本人は早起きだ。中国と同じように朝早くからジョギングや体操をしていた。こんなに早く起きる習慣はなかったが、回りのこうした雰囲気感化されて晴れやかな気持ちになった。

城の主建築は「天守閣」と呼ばれ、数百年も前のものだが、その堂々とした様は当時のままだ。石垣の大きな石からは当時の城廓建築の気概が見て取れた。残念ながら、見学は9時からということで中には入れなかった。9時といえば、ちょうど京都へ向かっている頃だ。今日はワコール、清水寺、高台寺を見学することになっている。企業見学の初日だ。今から楽しみだが、責任の大きさも感じる。今日の日記はここまでとしよう。

日付：5月28日(月) 1日目

大学名：北京交通大学

氏名：傅一楠

朝9:40、最後にもう一度日本行きの荷物に忘れ物がないことを確認してトランクの鍵をしめ、宿舎を後にした。

今日は日本へ旅立つ日だ。言葉にできないほどの感激が胸に満ちる。この行ったことのない国でたくさん喜びに会えると思うと、期待に胸がふくらむ。出発前、大学の共青团委員会の先生方に挨拶をした。先生方が大勢で見送ってくれていたが、自分が単に交通大学の代表というだけでなく、中国の大学生の代表として日本に行き、両国の友好を深めるという責任を負っているのだということを再認識した。この責任をどう果たしていくかが、これからの10日間の大きな焦点になる。

あつと言う間に空港に着いた。飛行機に乗ったその瞬間、日本への旅が始まった。全日空の行き届いたサービスと客室乗務員の誠実な笑顔が印象的だった。さすが礼儀の国、日本だ。

3時間のフライトの後、大阪の関西国際空港に降り立った。きれいなターミナルビルが疲れを吹き飛ばしてくれた。見るものすべてが珍しく、新鮮に感じた。中でも一番印象的だったことは、日本人の民度の高さだ。トイレにきちんと並び、道にはゴミ一つ落ちていなかった。こうしたすべてが日本人の民度と自制心を表していた。礼儀や高い素養が国民一人ひとりの心に沁み込んでいるように見えた。誰もが信仰のようにそれを守っていた。これこそが中国人のマナーが日本と比べ物にならないほど悪かったり、中国の環境がどうしても日本のようにはならなかったりする理由のように思えた。日本には学ぶべき所がある。この10日間の友好訪問は実り多いものとなるだろう。

日本式火鍋(しゃぶしゃぶ)を食べ、日本の賑やかな夜の街も見学した。日本の流行りのファッションと独特の雰囲気私たちが惹きつけてやまなかった。明日の企業見学もきっと学ぶべき所がいろいろとあるだろう。明日が楽しみだ！

日 付：5月28日(月) 1日目

大学名：首都師範大学

氏 名：齊暢

今回、10日間の訪日活動に参加し、中日友好のために貢献できることは非常に幸運なことだと思う反面、責任も重大だ。

今日は旅の1日目。ずっとこの日を待ち望んでいたのに、なぜか実感がなかった。初めて中国を離れて一衣帯水の日本に長く滞在するのが不安だったのかもしれない。ところが、飛行機に乗り、全日空の客室乗務員のやさしい笑顔に触れるや、一気に不安が吹き飛んだ。客室乗務員は面倒がることもなく、飛行機に乗り込むすべての乗客に挨拶をしていた。見ているこっちのほうに疲れて来るぐらいだったが、無理をしてそうしているような感じはなく、その溢れんばかりの笑顔にこっちの気分まで晴れやかになるのが分かった。機内のサービスもいたれり尽くせりで、塩やコショウまで準備され、自分の家に帰ったような気分になった。

窓際の席だったので、外の様子がよく見えた。雲を通して日本が徐々に見えて来た。思い思いに建てられた家々、碧い水に囲まれた街、美しい島国がそこにあった。日本についての最初の印象は「静か」だということと「清潔さ」だった。日本は国土が狭く、人に迷惑をかけたくないという思いが強いせいも、とても静かだった。「清潔さ」については今さら言うまでもないだろう。日本が清潔なことは、日本に行ったことのある人が口をそろえて褒める。日本に着いてまず行った日本一長い商店街も賑やかだが整然としていた。

夕食の後、ホテルに向かった。ホテルのサービスもすばらしかった。これで今日一日の日程がすべて終了した。明日からの行程のために英気を養うことにしよう。

日 付：5月29日(火) 2日目

大学名：国際関係学院

氏 名：欧陽文俊

中国大学生訪日代表団の2日目。ワコールの見学を終えると、雨の中を京都に向かった。今日起こったことのすべてに「一期一会」という日本語が思い出された。日本の茶道から来たというこの言葉の中には日本の伝統と企業経営の精神的支柱が込められている。

日本に来る前のワコールについての認識は、日本の下着ブランドで、故郷広州の友誼商店の中に出店しているというぐらいだったが、今回の見学を通じてワコールは最も尊敬する下着ブランドになった。なぜならこのブランドには単に売上が多いとか、業界をリードする製造技術があるということ以外に、ブランドとしての理念の追求があるからだ。それはとても貴いことのように思う。見学で印象に残ったことは「揺り籠から揺り椅子まで」（女性のために幼年期から老齢期までの商品を提供する）という考え方だった。女性の一生を見据えて下着を提供するというこの言葉には、ワコールの卓越した経営理念が見て取れると同時に、ワコールのお客様に対する真摯なサービス精神の表れのようにも思われた。また、その商品開発の姿勢から、ワコールが常にイノベーションによってお客様のニーズを満たし、業界のトップランナーとして進化し続けていることが分かった。優れた企業の商品とサービスは、単なるサービスという概念を越え、それはある意味、企業精神と理念との貫徹であり体现である。「初心忘るべからず」。創業当初から今日の隆盛まで一貫して創業者の理念が生きている。やみくもに利益だけを追い求める企業は必ず滅びる。母親と娘が2代にわたって使える丈夫な商品を提供できるワコールのような企業だけが消費者の心を繋ぎとめることができるのだと思った。

午後の京都への旅は、天気あまり良くなかったが、それで楽しい気持ちが萎えるということはない。京都に着くや茶道の体験をした。茶道は中国をその起源とし、日本で大成され、今に伝わる。茶道で言う「一期一会」という精神は日本人の中に生きている。それは見学した企業の中にも見て取れた。お客様のために最高の商品とサービスを提供する、常に改善のための工夫をするというのは、まさにこの日本茶道の精神の表れだと思う。こうした優れた文化と経営理念の融合は、まさに中国企業が日本企業に学ぶべきところのように思われた。茶道を堪能した後、高台寺と清水寺を見学した。天気はすっかりせず、清水寺に行く途中で雨が降り出したが、それでも楽しく観光した。清水寺でおみくじを引いたら「凶」と出たが、初めてのおみくじはやはり面白かった。清水寺のおみくじがはずれ、残りの8日間がずっと「大吉」で、感動と実り多いものになりますように……。

日 付：5月29日(火) 2日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：衣虹暁

午前:ワコール

今会社が100社あるとする。50年後はそのうちの5社が残り、100年後には1-2社、あるいは生き残っている会社がまったくないという状況になるのではないだろうか。おそらく消滅した会社は利益ばかりを追及していた会社で、目標や理念のある会社だけが残る。

ワコールの目標は世界中の女性をより美しくすることで国や社会に貢献することだ。ワコールの人間科学研究所には1000万人のデータがあり、人体によりフィットする下着の開発をしている。ワコールは単に利益を追及するだけの企業ではない。社会に関心を寄せ、ピンクリボン運動を通じて病気で乳房を失った女性のための下着を研究開発したり、公益事業として少女向けに下着や体についての正しい知識を教えたりしている。ワコールはデザインや価格の安さよりも下着をつけた時の快適さを追い求めている。100万人のデータを分析して最も心地の良いデザインを開発している。

午後:茶道体験 清水寺

初めて茶道を体験した。先生に教えてもらいながら自分でも抹茶を点ててみた。日本という国は本当に細かい所にまで気をを使う国だと思った。茶碗はどう持つか、どのように湯を茶碗に入れるかなどがきちんと決められていた。どの所作も細やかなものだった。日本文化の繊細さを垣間見たような気がした。

清水寺に行く途中、日本らしい店がたくさんあった。下駄や手ぬぐいが並べられ、日本の情緒に溢れていた。和服を着た女性にも会った。日本のどこに住みたいかと聞かれたら、迷わず歴史の香りのする京都と答えるだろう。雨が降り、観光客も多かったが、それでも古都京都は優雅な雰囲気を纏いつつ静かに雨の中にあった。

日 付：5月29日(火) 2日目

大学名：北京交通大学

氏 名：謝徳宝

一晩ゆっくり休んだ。今日は企業見学の1日目だ。見学先は株式会社ワコール。車は渋滞することもなく目的地に着いた。車がまだワコールの門に入らないうちから大勢の社員が出迎えてくれた。大企業のもったいぶったような態度がまったくなかった。

会社は京都市内にあった。周囲の建物はどれも低層で、古都の景観がよく保たれていた。ワコールの会社紹介は、どのようにすれば企業が長く続くかという設問から始められた。ワコールは女性の下着専門メーカーだ。1950年代に創業され、すでに半世紀の歴史がある。今に受け継がれる経営理念は、業績を上げて競争力をつけることではなく、人への思いやり、つまり世界中の女性をきれいにしたいという思いだ。商品の価格はそれほど安いとはいえないが、その品質は価格に見合ったものと言える。また、定期的に女性のための乳がん予防講座を開設しているという。商品の販売では、乳がん手術後の女性の補正に力を入れ、彼女たちが普通の生活にもどれる手伝いをしている。こうした社会貢献意識は中国企業も見習うべきだと思う。こうした会社を経営する際のコアとなる理念、即ち企業の文化理念の意義は、その後に見学したすべての企業に共通して見られた。

ワコールを後にし、午後は清水寺と高台寺の見学と茶道体験だった。「礼儀之國」という言葉は唐の時代に中国から日本に伝わったものだが、それは茶道文化の中に余すところなく体現されていた。碾茶、洗茶、点茶、点てた茶の出し方や飲み方、まったくいい加減なところがなかった。ちょっと堅苦しいと思われる儀礼の中に「静かなる禅」の境地が感じられた。「天を愛し人を敬う」、茶を供する際の敬虔な気持ちが胸に溢れた。こうした茶道精神が日本国民の民度の形成に果たした役割は計り知れない。

日 付：5月30日(水) 3日目

大学名：中国農業大学

氏 名：曾歆

前の晩夜更かしてしまったのでとても疲れていたが、今日の日程はすばらしかった。字がきたないのは眠いからで、お許してください！

主に静岡県農林技術研究所とその付属学校について書くことにする。案内役の先生はとても熱心で、丁寧に質問に答えてくれた。ここで開発された技術の普及に関する質問では、安定した技術は農家にとても良い形で採用されているという答が返って来たが、これこそが中国に欠けているものだと思った。中国では科学技術の農村への普及が大々的に叫ばれているにもかかわらず、技術を学ぼうとする意識に欠け(多くの場合)、技術の普及が遅々として進まない。中国は日本の農業経営モデル、つまり経営体についてしっかり学ぶべきだと思う。中国の農家は社会の底辺にある。苦勞して作物を育てても、安い価格で業者に引き取られ、業者がそれらを他の地方に転売する、どこまでいっても農家が儲からないようになっている。農村の若者の多くが、村で農業をやるくらいなら、都会でアルバイトをし

たほうが良いと考えている。「なぜ農業を専攻し、畑で作物を作ることを選んだのか」解らず、農林大学の学生に質問した人がいた。「高校生の時に畑で野菜を作る経験をしてすっかり好きになってしまったから」「親戚に農家がいるから」という答だったが、これはおそらく中国の大学生には理解できないことだ。自分が当時進学先に農業大学を選んだ時も回りの人たちは理解に苦しんだ。農業は国の根本であるとして、どの国も農業を重視しているが、中国人の考え方の中にはどうしても農民を見下すような気持ちがあるが、中国には膨大な農業人口がいること、自分たちの家も何らかの形で農民と関係があることを認めざるを得ないだろう。ともあれ今は農民の生活もだいぶ改善され、暮らし向きも楽になってきている。

<ヤマハ発動機>

ヤマハ発動機の二輪車工場はすばらしかった。部品自動供給機が軽やかかつ整然と部品を運び、時々音楽を鳴らしていた。生産ラインでは作業員が真剣に仕事をしている。平均2分間に1台の割合で二輪車が組み立てられるというのには驚いた。完成した二輪車はカッコ良かった。色が鮮やかでとてもいいと思った。記念写真(1人1枚)をもらった。嬉しかった。ヤマハはいろいろなものを製造しているが、マリン関連製品などは、中国にはさほどマーケットがあるようには思えなかった。中国では多くの都市でオートバイを規制している。大気汚染は二輪車だけが原因で、車は関係ないということでもあるまいし。それに自動車のほうが二輪車よりも安全だという保証もない。電気自動車の使用済電池による環境汚染のほうが問題は深刻だと思う。

<温泉旅館>

温泉にはいった。気持ち良かった！満喫した！温泉にはいったことはなく、初めての経験だった。何とも幸せ！

日 付：5月30日(水) 3日目

大学名：首都師範大学

氏 名：黄毓鴻

午前、静岡県農林技術研究所と農林大学を見学した。職員から研究所の組織についての説明があり、実際に温室にまで連れて行ってもらった。農業のことはよく知らないが、この農林技術研究所の見学を通じて農業に興味を湧いて来た。農林大学の授業を見学したが、学生の数は少なかった。言葉の関係で先生が何を言っているか解らなかったが、みんな真剣に先生の話聞いていた。学生の年齢は僕たちと変わらないようだったが、見たこともない農機具を慣れた手つきで操作していた。

農林技術研究所の次はヤマハを見学した。ヤマハは中国でもよく知られたブランドだ。オートバイを持つこと、特にヤマハのオートバイを持つことは男子にとっての夢だ。こんな気持ちでヤマハの工場を見学した。ヤマハの経営理念とその目指す所は「感動を・ともに・創る」。感動を創造するための原動力は飽くなき追求と細かい事への拘りだと思う。組み立て工場では、自動化レベルの高い製造ラインと真剣に仕事をする作業員によって、作業効率と製品品質がみごとに融合されていた。

それから新幹線に乗って箱根に移動した。夜は豪勢な会席料理に舌鼓を打った。懇親会では団員がそれぞれ芸を披露し、とても盛り上がった。食事が済むと、ほろ酔い気分で有名な箱根の温泉を楽しんだ。一日の疲れが吹き飛び、畳に敷かれた布団の上でぐっすり眠った。

日 付：5月30日(水) 3日目

大学名：首都師範大学

氏 名：楊肖肖

今日は疲れたが、充実した1日だった。午前は静岡県立農林技術研究所と農林大学に行った。農林技術研究所で

は温室と農場を見学した。日本の農業は中国とはだいぶ違っていた。まず、日本の農業の特徴は細かい所にまで気を配ることだと思った。農作物の品質にこだわり、ハイテクを駆使し、できるだけ農薬や化学肥料の使用を減らすことで、安全な農作物を心がけていた。次に、日本の農村と都市部の生活水準の格差が小さかった。ほとんど差がないようにも思えた。土地の私有権が認められていて、日本の農家は社会的に見て裕福な層に属しているようだった。農林大学は高校卒業後に農業を目指す人たちのための2年制の学校である。1年目は主に理論的な知識を学び、2年目は実践に重点が置かれている。いろいろな農機具を手にトウモロコシ畑で実習を行っているクラスがあった。ヒマワリを植えているところだった。

午後はヤマハ発動機株式会社の本社工場を見学した。ヤマハは感動の創造をその経営理念としている。二輪車を製造している第3工場を見学した。案内係の人が言うには、2分に1台の割合でオートバイを製造しているとのことだった。工場の中では各種部品が自動台車に乗せられて運ばれていた。組み立て作業は細かく分けられ、それぞれの作業員が責任をもって行っていた。効率アップのために、組み立てに必要な部品を置く位置までが厳しく決められていた。次々に組み立てられるオートバイ、ラインで真剣に働く作業員たち、胸があつくなった。

今夜の宿は箱根の温泉旅館。青々とした山に囲まれ、窓からは滝の音が聞こえる。カーテンを開けたときは、まるで自分が絵の一部になったような気がした。なんて美しい景色なんだろう……。夕飯は豪華な会席料理で、訪日後最初の懇親会ということになった。

大学ごとに出し物を披露した私たちの大学も興に任せて最後まで歌えない「小手拉大手」と誰も歌えない「最炫民族風」を歌った。一番良かったのは農大と交通大学の合唱「朋友」だった。歌の世界に引き込まれ、思わずみんな舞台上が上がって一緒に歌い出した。「朋友一生一起走，那些日子不再有，一句話，一輩子，一生情，一杯酒……」

懇親会の後は浴衣に着替えて温泉にはいった。初めての温泉は本当に気持ち良かった。寝てはいることのできるお風呂など、いろいろなお風呂があった。露天風呂からは月が見えた。気持ち良く温泉につかって部屋にもどった。今日1日疲れたせいか、あるいは温泉の効能か、すぐに眠ってしまった。

日 付：5月31日(木) 4日目

大学名：国際関係学院

氏 名：李琳

今日は充実した1日だった。箱根を出発して、午前には鎌倉を見学し、午後には横浜、夜は東京の銀座で夕飯を食べた。そして最後に楽しみにしていたニューオータニに着いた。

これまで資生堂というのは有名ブランドとしての認識しかなく、その社名の由来については知らなかったが、『易経』の中の「至哉坤元，万物資生(いたれるかなこんげん ばんぶつとりてしょうず)」という一句から付けたということだった。この社名の由来を聞いて、資生堂はきっと独特の企業文化を持った会社だと思ったが、果たして訪日団の乗った大型バスが鎌倉工場の玄関に着いた時、「良い品を良い人で、お客さまの喜びを私たちの喜びに」というスローガンが目に入った。メモをしたわけでもないのに、一目見て覚えてしまったのは感動したからだ。このスローガンを見て、資生堂がお客さまを自分の友人のように大切に思っていることが分かった。会社説明や工場見学のときも社員の誠実さと友情が伝わって来た。資生堂がなぜ今のような国際的な大ブランドになれたか分かったような気がした。

午後は係留されている観光船「氷川丸」を見学した。船に乗ったことのない私は、見学の間中「タイタニック」のことを考えていたが、「氷川丸」のほうが「タイタニック」よりもずっと生命力があると思った。「氷川丸」には豪華さと歴史がある。豪華さという点では、1、2、3等に分かれたレストランやステージ、喫煙室があるほか、船体を安定させるための装備が取り付けられていて陸地のような安定感があった。歴史の古さということでは、「氷川丸」は日本で唯一第二次世界大戦の戦火を逃れた船だけあり、今も大海を航行していた当時の雄姿を伝えている。

日 付：5月31日(木) 4日目

大学名：中国農業大学

氏 名：尹肖貽

<午前 曇り後晴れ 資生堂の見学>

朝、目を醒ますと、同室の3人は温泉に入りに行っていた。みんななんて元気なんだろう。僕は疲れていたので行かなかったが、朝食の場所の優雅な雰囲気と窓の外の景色が、朝温泉に入りに行けなかった後悔をすっかり吹き飛ばしてくれた。

午前の見学は、30分ほど遅刻した団員がいたために、資生堂に着いたときには9時半になっていた。資生堂は古くて若い会社だった。販売部門の人が見学の対応をしてくれた。会社紹介の後に生産ラインを見学することになったが、白衣と帽子で全身を覆い、手はアルコールで消毒し、体についた埃は送風機ではらうなど、工場内の衛生面の要求の厳しさは相当なものだった。口紅を生産するときに使う製剤は、原子レベルの技術を開発するのに20年の時間を費やしたということだが、この忍耐力とどんなことも疎かにしない態度に感服した。

資生堂のもう一つの特色として、社員が自分の会社を大切に思い、社員の一人ひとりが会社をしょって立っているという気概がある。「気合を入れて職場のやる気を引き出し、心を沸かして、心をこめて商品をつくり、思わず商品に“ありがとう”と言いたくなる」とあるエンジニアが言っていた。商品検査担当の人は「こうなればいいと思うことを現実のものにし」、最高の品質を以って「お客様に報いる」とも言っていたし、「お客様の希望する物以上のものを作る」と言葉も聞いた。

見学の案内役の人が説明してくれた「擦りガラス」の原理で顔のシワをのばす方法や、生産ラインの作業員の名札によって担当の仕事を見分けるようにしているなど、真面目な態度で仕事に臨めば、不合格の製品が出ることはほとんどないだろう。優れた製品を生み出す資生堂の秘密はこのあたりにあるのかもしれない。

<午後 晴れ 氷川丸と郵船歴史博物館の見学>

氷川丸は日本の豪華客船の誇りであり、今は山下公園に観光用に係留されている。氷川丸はもともとは豪華客船だったが、戦争が始まってからは輸送船として徴用され、その後も30年にわたって航海を続けている。鋼板の厚さは18.3mmと、現在の10mmの約2倍の厚さになっている。リベット接合のために船体が重かったので、今は1週間ですむ横浜からシアトルまでの航海に2週間を要したという。氷川丸の計装類と駆動システムに興味があったが、知識不足でうまく質問することができなかった。みんな写真を撮りまくっていた。最後に船長さんと記念写真を撮った。

郵船歴史博物館では各種船舶や郵船の歴史が紹介されていた。残念なことに第二次世界大戦中に大部分が沈没してしまったというが、日本の海運業は依然として発達している。大学生訪日団の見学用にといいことではなく、館内資料の中に中国の海運業に関する記述が何カ所もあった。例えば、鉄鋼や原油の船舶輸送に関する説明では、日本の状況が紹介されたすぐ後に、中国がいつ日本を超えるかという記述があったが、これは国力と関係があると思った。いずれにせよ、博物館のこうした態度、真実を伝えつつも自国と他国の違いを分析するという科学的態度は中国も学ぶべきだと思った。

日 付：5月31日(木) 4日目

大学名：北京交通大学

氏 名：沈慧

資生堂という社名は、『四書五経』史列最初の経書である『易経』の坤卦部分の「至哉坤元，万物資生(いたれるかなこんげん ばんぶつとりてしょうず)」に由来し、新しい生命を育む大自然の恩恵に感謝した言葉だというが、この社名は資生堂の常に新しい価値を発見・創造していこうとする精神を十分に体現しているように思う。1872年、東京の銀座に日本初の西洋式薬屋が出現した。資生堂の誕生である。今や100年の歴史を誇るグローバル企業は、東洋の美学

と西洋の科学技術の結合を目指し、今も世界の人々に豊かで美しい生活を届けるための努力を続けている。今や資生堂は日本だけでなく、世界各国の消費者に歓迎される企業になっている。

資生堂には「良い品を良い人で、お客さまの喜びを私たちの喜びに」という理念がある。会社の紹介ビデオを見て驚いたのは、すべての社員がその仕事のいかににかかわらず、溢れんばかりの情熱をもって仕事に取り組む姿だった。研究所では新商品開発のための試験が何度も行われ、工場では品質確保のために厳しい品質検査が行われている。こうした部門間の協力があってはじめて高品質の商品を消費者に届けることができるのだと思う。製品の一つひとつが社員一人ひとりの智慧と技術、汗の結晶だ。それを示すものとして挙げられた例が印象に残る。女性の唇に潤いを与える商品を開発しようということになったとき、研究員が曇りガラスの反射原理を使うことを思いついた。そして20年もの歳月を費やして終にパールパウダーを加えた口紅を開発したという。こうした消費者に対して責任を果たそうとする姿勢や旺盛な研究意欲は、中国も見習うべきだと思った。

また、資生堂はその豊富な経験とスキンケア商品の技術によって「優れた品質、優れたイメージ、優れたサービス」という販売理念を代々受け継ぎながら、社員の職場環境を整えることに努め、全ての力と資源を公益事業に捧げ、責任ある企業市民に成長している。「一瞬も一生も美しく」というコーポレートメッセージは、資生堂と消費者との間で交わされた重い約束であり、社員の一人ひとりが心を合わせて努力し、消費者に優れた商品とサービスを提供することを目指してこの使命を履行している。工場見学では、大型設備や自動化された生産ライン、更には作業員に対して厳しい除塵要求を設けることで清潔な環境を保ち、品質を保障しているところが印象に残った。

次の日本郵船の氷川丸と博物館の見学では、日本という島国の航海・郵船業の潜在力を感じた。氷川丸の船上見学では、日本の郵船業が紆余曲折を経て今に至ること、最初は長崎しか対外的に開放されていなかったこと、氷川丸だけが戦時中に軍用に徴用されながらも第二次世界大戦の戦火を免れて生き残り、その82年のキャリアには特別な歴史背景があったことを学んだ。1953年以降、日本の海運業も回復し、貨物船及び客船として氷川丸も太平洋を航行していたが、1961年に山下公園の埠頭に係留されることになる。ちょうど横浜開港100周年目ということで、氷川丸の見学が一層感慨深いものになった。

博物館では日本の海運史が紹介されていた。1000隻にも及ぶ船の模型が陳列されていたのには驚いた。航海事業の発展に伴う旅行用トランク、雑誌、文献、各地の風俗を紹介した記事など、海に関する文化について学ぶことができた。博物館は規模こそ小さかったが、膨大な歴史的記録を収蔵しており、日本の海運業の変遷やそれぞれ特徴のあるマリン文化を体験させる力があつた。

日 付：6月1日(金) 5日目

大学名：中国農業大学

氏 名：楊妍

今日から6日間の東京の旅が始まった。バスに乗って長い時間移動しなくてすむということは、朝の5時、6時に起きなくてもよいということであり、十分な睡眠時間をとって旅の疲れをとることができるので嬉しい。起床後は下に降りて朝食をとることになっていた。どのレストランで食べるか、3人であれこれ悩んだ末、最初の朝の食事は景色の一番いいレストランでとることにした。窓の外の木々や池の鯉を見ていると、こっちまで清々しい気持ちになった。

まず六本木ヒルズで「ONE PIECE」展を見た。「ONE PIECE」は中国語では「海賊王」と訳されている。この漫画は尾田栄一郎の原作で、その人気はさまざまな年齢層にまで及ぶ。これまでに66冊の単行本が出版されているが、日本だけでも2億6000万冊を売り上げているという。「海賊王」は読んだことはないが、朝早くから列をつくって漫画展を見ようとしている人たちを見れば、この漫画がどれだけ人気があるかが分かる。「ONE PIECE」展では、原作者の高い技術と想像力が漫画の原作や動画によって展示されていた。ちょっとしたスケッチからキャラクターが生まれ、鮮明なイメージが作られていく過程が印象的だった。

昼食の後はJR東日本を見学した。JR東日本は日本の国鉄分割民営化後に誕生し民間鉄道会社4社のうちのひとつである。経営範囲は東京・千葉・神奈川・埼玉といった東日本一帯で、4社のうちで規模が最も大きい。JR東日本の業務のうち運輸業や「駅ナカ」ショッピングモールや土地の賃貸業務で採算がとれていないという。JR東日本の経営上の最大の課題は安全問題で、次にいかに国内旅行する人の数を増やすかということと技術の開発という問題がある。技術の進歩により列車のエネルギー消費が減り、効率がアップしているほか、安定性と騒音削減面でも成果をあげているが、収益拡大という目的で路線を増やしたり生活サービス型業務にも力を入れている。

最後は三菱商事株式会社の見学だった。三菱商事は日本有数の総合商社の一つで、主に産業投資、特にエネルギー産業への投資が活発である。マネジメントのできる優秀な人材を派遣したり、資金や提携のための協力ネットワークを提供したり、あるいは産業型企業と協力関係を築くなどして配当をはじめとするさまざまな収益を得ている。

夜は東洋文庫を見学した後、三菱商事の社員との懇親会があった。東洋文庫には膨大な数のアジア地域の古い文献が収蔵され、国宝級の作品もあった。三菱商事の社員との懇親会は日本や三菱商事という企業を理解するのに役立った。

日付：6月1日(金) 5日目

大学名：北京交通大学

氏名：沈慧

午前には日本だけでなく中国の若者までが夢中になっている「ONE PIECE」展を見に行っただけではないが、彩り鮮やかなアニメのキャラクターや漫画原稿を見て、世界のアニメ産業の原動力とも言える日本アニメが、独特のキャラクターやストーリーによって誰にも真似のできないアニメ文化を形成し、世界に発信し続けているすごさをあらためて思った。

次のJR東日本旅客鉄道株式会社の訪問は、北京交通大学の学生として実り多いものだった。特に以下の点が勉強になった。まず日本の鉄道経営モデルである。深刻な業績不振を払拭するために、長年赤字続きの国営企業に大転が振るわれ、組織改編によって民営化されることになった。JR東日本では新しい経営手法が採用されていた。68%は鉄道運輸の収益だが、残りは「駅ナカ」ショッピングモールや土地の賃貸、車内広告の収益だという。特にSuicaが収益増に貢献している。これらは中国の鉄道経営方式には見られないものなので参考になると思う。会社紹介では安全、環境保全、技術開発面の課題や主な手法についての説明があったが、一番印象的だったのは、JR東日本が常に安全を何よりも優先させている点だ。毎年利益の大部分を最先端の安全システムに費やし、地震や台風時の乗客の安全確保に努めている。

また、JR東日本は時代に合わせて経営戦略を変えることで、マーケットの変化に対応して付加価値を高めている。今、日本では高齢化問題が深刻さを増し、人口も減って来ているが、それはJR東日本の乗客大幅減にも繋がる問題である。こうした外部圧力に対応すべく、JR東日本では新型の省エネハイブリッド車両を開発したり、新幹線の建設を強化し観光ルートの開拓したりして収益アップに努めている。中国企業にとっても参考になる戦略的な経営だと思う。急成長のただ中にある中国にはチャンスもあるが、課題もある。現実に即したイノベーションと課題を解決していく努力しないことには企業の成長はない。中国の鉄道の現状を念頭に、交通大学の学生としてJR東日本の技術的な強みや雪害対策、世界屈指の騒音削減技術、車両の色やインテリアの地域的特色等について質問してみた。日中鉄道友好推進協議会の先輩技術者達とCRH2とCRH5の運行や通風システムについて意見交換をしたが、2つを比較することで今の中国の鉄道に不足しているものが何であるかがはっきりと分かったし、日本が得意とする技術はやはり参考になると思った。今日の見学は今後の勉強とキャリアプランにとっても役に立ったような気がする。

次の三菱商事本社の見学では、国際的な総合商社の経営理念「三綱領」について学んだ。「所期奉公」(事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえのない地球環境の維持にも貢献する)、「処事光明」

(公明正大で品格のある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する)、「立業貿易」(全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る)。三菱商事はまさにこうした企業理念によって今日のような国際的な総合商社になることができた。三菱商事は日本国内と約90ヶ国に200以上の拠点をもち、500社以上の連結子会社と共にビジネスを行っている。社員との懇親会ではお互いの企業、文化、青少年の教育面の違いや特徴について話した。東洋文庫を見学した後、三菱商事の社員と一緒に夕食をとりながら、日本の家庭や仕事のストレス、これからのライフプランなどについて話したことで、日本企業と日本人についての理解が深まったような気がする。

日 付：6月1日(金) 5日目

大学名：北京交通大学

氏 名：傅一楠

今日は「国際子どもの日」だ。20歳の青年にも童心はある。日本商会と中日友好協会はこの点を十分承知していて、「国際子どもの日」に相応しい日程を用意してくれていた。特に楽しかったのは「ONE PIECE」展だった。六本木に向かう車の中でも多くの団員が待ちきれない様子でそわそわしていた。会場に入る前に渡辺さんからこのアニメを見たことがあるかと聞かれた。「ちょっと見たことがある」と答えた。「ONE PIECE」はそんなに見たことはないが、その中で描かれているアドベンチャー精神には惹かれるものがある。一群の熱血青年が目標に向かって困難に立ち向かっていくときの団結力、互いを思いやる心、彼たちの困難とそれに打ち勝っていく姿に心打たれた。また、日本のアニメ産業の急成長とその成功ぶりを肌で感じる事ができた。さまざまなビジュアル的な楽しさのほか、アニメの中に体现されている精神について考えた。中国に「一花一世界，一葉一菩提」(一輪の花に世界を見、一枚の葉に如来を見る)という言葉がある。取るに足りない小さな物でもその背後に深い意味がある。アニメ的一幕一幕に人々は啓発され、私自身も数え切れないほどの感動をもらっている。

「ONE PIECE」展の興奮も冷め、次にJR東日本を見学した。JR東日本には150年の歴史があり、ホームの数は合計1689本、総運行距離7512キロメートル、1日当たりの乗降客数1659万人。膨大な鉄道を経営し、かつ毎年利益をあげているというのは世界でも珍しい。JR東日本がどのような技術と経営理念によってこうした世界屈指の地位を築いて来たのか、興味を持った。会社紹介の説明を聞いているうちに、先進的な日本の鉄道技術は速度だけを問題にしていることが分かった。日本で製造される車輛は速度、安全指数、快適性等のさまざまな角度から設計されている。いといと研究を重ね、調査・分析によって技術の改善を図り、走行時の揺れやカーブ時の傾きを減らすなどして安全で快適なものをという目標を達成している。おそらくこうした技術は中国にはないだろう。また、JR東日本では行先に合わせて車内のインテリアを変えるなど、細かい心遣いによって有数の鉄道会社になっている。

JR東日本の次は三菱商事を見学した。三菱商事の社員と一緒に東洋文庫を見学し、夕食を共にした。一番心に残ったことは、三菱商事の巨大な産業チェーンと社員の仕事に対する姿勢だった。また、三菱商事の投資を中心にした経営手法にも驚いた。まるで不可能なことはないとでも言うように、業務をさまざまな分野に拡大して成果をあげている。三菱商事のトップが言うには、社員教育を非常に重視しているので、どの社員も能力が高いという。企業は優秀な社員の育成に成功し、社員は自分の会社を優良企業にすることに成功したことになる。

今日は収穫が多く、いろいろと考えることも多かった。充実した「国際子どもの日」だった。まだあどけなさの残る他の団員にとっても楽しい1日でありましたように……。

日 付：6月2日(土) 6日目

大学名：国際関係学院

氏 名：于文華

終に待ちに待ったHomestayの日だ。ここ数日、訪日団の団員としていつも団体行動で工場や企業を見学し、たくさんのお話を学んで来たが、それは1人で日本の街を歩き、自分の力と語学力だけを頼りに日本の家庭を体験するのではまったく気持ちが違って来る。その意味でこの10日間の旅で一番楽しみにしていたのが1日半のHomestayだ。

言うまでもなく、中日両国の間には歴史的な理由によって硬くて溶けない氷がはっている。日本語を勉強したことがなく、日本の文化をまったく解さない人たちにとっては、日本という国や民族について語るのはやはり不愉快なことかもしれないが、両国の国民同士の交流がなければ、こうした認識はいつまでも続き、なかなか改めることはできない。このように考えると、民間交流こそが氷をわるための最も有効な石だということが分かる。日本人の友情と中国人に対する態度をしっかりと受け止め、親しい人たちに伝えていきたいと思う。ささやかなことかもしれないが、十分意義のあることだと思う。

今回日本に来て自分の日本人に対する見方がずいぶん変わったように思う。ずっと両国の間には壁や摩擦があるように思っていたが、今思えば、まったくの思い過ごしだった。中国は日本の不幸な過去に、日本は中国の貧困に苦しむ人々に同情している。まさに世界は一つであり、こうした友情と思いやりは民族の枠を越えて生まれる。

中日友好協会と中国日本商会はすでに10回の「走近日企・感受日本」活動を行っている。これは大学生を対象にした活動であり、期待した通りの成果をあげている。こうした活動は大学生の成長にとって有益なだけでなく、中日両国の民間交流や経済協力、あるいは政治的緊張の緩和という意味でも有益なことだと思う。この活動がさらに内容豊かで充実したものとなって長く続いてほしいとも思う。それは中国の大学生にとって喜ばしいことであり、中日両国民の願いを叶えるための良い方法のように思われる。

日 付：6月2日(土) 6日目

大学名：国際関係学院

氏 名：王瀚霖

今日は待ちに待ったホームステイの初日だ。日中経済協会には時間よりも早く着いた。皆そわそわしながらホストファミリーが迎えに来てくれるのを待った。この感覚は、ちょうど孤児院の子どもがお利口さんにして新しい「お父さん」「お母さん」の家に連れていってもらったときのそれと似ていると思った。

しばらくすると、団員が次々と嬉しそうにしてホストファミリーの人と一緒に出て行った。それにしても僕のホストファミリーはなかなか来ない。とうとう僕1人を残すだけとなった時、ようやく秋葉さんが来てくれた。30歳ということだが、ちょっと30歳には見えなかった。すらりとしていて、ヘアスタイルもカッコよく、まるでお兄さんのようだった。

秋葉さんはまず本屋さんに入って中国語の教科書を買って、地下鉄の駅まで「ダッシュ」した。あえて「ダッシュ」という言葉を使う。地下鉄の乗り換えの時は100mのラストスパートのようなスピードで階段を降りた。一気だった。秋葉さんはケロッとしていたが、僕はできるだけ平静を保ち、何でもないふりをしていた。

秋葉さんに運動が好きかと訊かれたので、「フィットネスが好き」と答えると、彼は嬉しそうに「自分も」と言った。ヒマがあればスポーツジムに行ってテニス、サッカー、水泳、自転車、有酸素運動をしていると言う。ジムに行きたいかと訊かれた。行きたくないとは言えなかったため、覚悟を決めて行くことにした。電車に乗ってまず秋葉さんの家に行き、23歳になる弟さんに会った。就活中ということで挨拶をただけだった。その後、車で柏市内のスポーツジムに行った。日本人は中国人よりもずっと運動好きのようだった。水泳、テニス、ランニングマシンどれも大盛況で、予約制になっていた。僕と秋葉さんはバーベル運動を1時間ほどやった。頑張ったが、最後の数分間はギブアップしてしまいそうになった。膝がガクガクしていた。回りを見ると、若い人も年のいった人も諦めたりサボったりしている人は一人もいなかった。

これには驚いた。

次はテニスをやろうとしたが、人が多くて一人分しか空いていなかった。秋葉さんは自分だけやるわけにはいかないと言って、1時間ほど待ってスピニングバイクに乗ることにした。中国ではいつも自転車に乗っているので大丈夫だと思ったが、それは考えが浅かった。普通に自転車をこぐのだとばかり思っていて、まさかお尻を浮かしてこぐとは思ってもよらなかった。これには参った。後半は膝が自分の体重を支えきれなくなっていた。あさって以降の日程に影響が出ては大変だと思い、最後はお尻を浮かしてこぐのをやめることにしたが、日本人の頑張りには本当に驚いた。誰もギブアップしなかった。後ろにいるインストラクターの声に合わせて気合を入れ、いい加減にやっている人は1人もいなかった。「ああ、中国の若者よ、もっと熱くならなければ……」。

スポーツジムでの運動が終わってお風呂に行くことになったが、秋葉さんが気を利かせてクレンジングクリームとシャンプーを用意してくれていた。それ以外にもスイミングパンツやウェア、靴を準備してくれたり、事前にジムのトレーナーに声をかけておいてくれたりと、僕の今日の訪問のためにいろいろと準備をしてくれていた。それから車でデパートを2ヶ所回って秋葉さんお勧めのドーナツを探した。運動の後のスイーツとコーヒーは格別だった。

スイーツを食べ終わると、電車に乗って秋葉さんのおばあさんが住むマンションに行った。ドーナツが夕飯のかわりだと思っていたが、おばあさんが特急で美味しい夕飯を作ってくれた。カツ丼はレストランの味と変らなかった。おばあさんはわざわざ僕のためにパジャマを用意してくれていたばかりか、自分のベッドを僕に譲って自分は布団を敷いて寝ると言って譲らなかった。本当にありがたいと思った。何度も自分が布団で寝ると言ったが、おばあさんは夜トイレに行くから「大丈夫、大丈夫」と言ってきかなかった。これはおばあさんの僕という外国からのお客様に最高のおもてなしをしたいという気持ちだということが分かり、仕方なくベッドで寝ることにした。おばあさん、ありがとう。秋葉さん、ありがとう。

日 付：6月2日(土) 6日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：王藝霏

今日から楽しみにしていた2日間のホームステイだ。訪日第1日目に渡辺さんが、私のホストファミリーとなる木村さんが、私が日本アニメが好きなのを知り、ジブリ美術館のチケットを買えるかどうか調べているのを知り出した。それを聞いた私は大喜びすると同時に、その偶然に驚いた。なぜなら日本に来る前に友だちが「ホストファミリーがジブリ美術館に連れて行ってってくれるといいね」と言っていたからだ。この知らせに神様に願いが通じたと思った。

朝、日中経済協会に行きホストファミリーが迎えに来てくれるのを待った。団員のみんなが次から次にホストファミリーに引き取られて行くのを見て、私のホストファミリーの木村さんが早く来てくれることを願った。また彼女がどんな人なのか好奇心が膨らんでいった。ついに彼女がやって来た。きれいな可愛らしいお姉さんだった。会ってすぐに彼女が何語で話したらいいか訊いてくれた(私の言った日本語に戸惑ったようだ)。次に彼女は何が好きか、何をしたいかを一つ一つ確認し、若者に一番人気の原宿に連れて行ってくれた。地下鉄に乗って行くことになった。地下鉄の駅では切符の買い方を教えてくれた。原宿に着くと、ジャニーズのプロマイドを売っている店を見た。木村さんは私につきあって辛抱強く列に並び、人でごった返している中、私の好きなKAT_TUNのプロマイドを一緒に探してくれた。人の熱気で店の中は非常に暑かったが、最後までつきあってくれた。買い物が終わる頃にはヘトヘトに疲れてしまったが、木村さんが昼ごはんを食べに連れて行ってくれた。

ジブリ美術館のチケットが買えなかったのを申し訳ないと思ったからか、東京スカイツリーのジブリ専門店に行くことになった。となりのトロなどの宮崎駿作品のキャラクターグッズが売られていた。次に日本みやげをいろいろ売っている場所——浅草に行った。木村さん(以下「優さん」と呼ぶ)お勧めのおやつと一緒に食べた。本当に美味しかった。お茶を買う時も、私が何のお茶が好きか分からないので、優さんは2種類のお茶を買い、「もし気に入らなかったら自

分のを飲んでもいい」と気を遣ってくれた。

夜、一緒に家に帰った。彼女の家は東京から約1時間の千葉県浦安にあった。周囲にはたくさんの桜の木が植えられ、素晴らしい環境だった。家に着くと、優さんのお母さんが迎えてくれた。できるだけ英語で話しかけてくれてとても親切だった。お母さんは餃子を作るのがとても上手だった。私の包んだ小さな餃子を見て、二人が「可愛いね」と言った。優さんが包んだ餃子は具がたくさん入っていてパンパンにふくらんでいた。二人から何の料理ができるかと訊かれたので、トマトと卵のスープを作ることにした。お母さんは必要な材料を出すのを手伝ってくれたが、優さんは日中辞典を見ながら、私に「私は怠け者」は中国でどう言うのか訊いたりしていた。とても可愛いと思った。

中日折衷の夕飯を食べた後は一緒に二人の好きなバレーボールの試合を見た。私は自分の家族や学校、旅行で行ったことのある場所などの写真を見せた。二人とも「すごいねえ」「すごいねえ」と言っていた。こうして楽しい夜が過ぎていった。優さんがディズニーランドの打ち上げ花火が見えると言ったので、10階の廊下から夜景を見ながら優さんとおしゃべりをした。夢のようだった。お母さんが布団を敷いてくれた。私のためにわざわざ和室を用意して、畳を体験させてくれたのだと思う。気を遣って枕元に小さなスタンドまで置いてくれた。ぐっすりと眠ることができた。

日付：6月2日(土) 6日目

大学名：北京交通大学

氏名：牛駿宇

ここ数日に行った日本の名所や企業見学にはいつもガイドさんがついていてくれたし、仲間もいて、どこに行くにも一人ではなかったが、今日は単独で行動しなければならない。知らない日本の家庭に1泊するのだ。ホストファミリーを待っている間、とても不安だった。日本語が話せないのも、うまくコミュニケーションができるか心配だった。何をしても不安はつきものだ。自分は経験が足りないし、考え方も単純だが、いずれにしても時間は過ぎ、出来事もそれに連れて過ぎていく。あの時もし違うやり方、違う態度をとっていれば、もっと良い結果になっていたのだろうか。

期待を胸にホームステイという初めての経験に向き合うことにした。ホストファミリーに会ったとたん、緊張がほどけた。ホストファミリーは1組の若い夫婦で、とてもやさしそうだった。自分のほうから挨拶をした。彼らは中国で1年暮らしたことがあり、中国語が話せた。不安がまったくなくなった。

今日1日、いろいろな場所に行ってお互いのことを理解することができた。2人の温かいもてなしがとても嬉しかった。1時間余り電車で揺られ家に着いた。途中、ゴミ箱を一つも見かけなかった。以前にもゴミ箱がないのに日本の環境はどうしてこんなに清潔なのか不思議に思ったことがあったが、ホストファミリーの家に行ってようやくその理由が分かった。ゴミがしっかりと分別され、指定された場所に捨てられていた。ゴミは可燃物、紙類、ペットボトルなど非常に細かく分別されていて、目がチカチカしてしまった。一つひとつメモするしかなかった。日本は天然資源が少ないので、ぎりぎりのところまでゴミの再利用が行われていた。この点は中国も見習うべきだと思った。

ホストファミリーの家はとても清潔で、いろいろなものが整然と置かれていたので、少しも物が多いという感じはしなかった。特に空間の利用の仕方がすばらしかった。家はそれほど大きくないが、上から下まで立体的に仕切られ、いろいろな物が置けるようになっていた。国土の狭い日本から資源と空間の利用の仕方を教えてもらった。

日付：6月3日(日) 7日目

大学名：中国農業大学

氏名：楊妍

朝早く起きて今日の強行軍のための準備をした。まず色とりどりの日本式の朝食をとった。ホストファミリーで食事するのは2回目だが、日本の専業主婦は「えらいなあ」と思った。料理の時間が短い。しかも簡単な食材から一種の芸

術品にまで創り上げるその完璧な技術と熟練ぶりには驚かされた。日本の主婦の作る料理はレストランで出されるものと変わらない。見た目も味も抜群だ。日本人の細やかな心配りは生活のすみずみまで反映されている。日本人の生活に対する細かな配慮は随所に見られ、そうした美の創造と美の薫陶によって礼節と道徳観を生み出している。

出かける準備が終り、最初の目的地である皇居東御苑に向かった。皇居東御苑は皇居外周の東側に位置し、すばらしい環境と独特の造型をしていた。大阪城と同様に石垣の城壁があり、有名な富士見櫓があった。昔はこの櫓の上から富士山を見ることができたと言うが、今はビルに隠れてしまって富士山は見えないだろう。正門の装飾や庭園の灯籠など、公園にはいくつか戦火をくぐって残ったものがあった。

次に地下鉄に乗って浅草に行った。みんな午前中ずっと歩きづめで疲れ切っていたので、まず鰻屋に入って鰻重を食べた。ウナギはタレに浸してから炭火で焼いた後、切り分けてご飯の入った重箱に盛り付ける。鰻重は今までに食べたことのある日本料理の中で一番美味しかった。甘くて魚の生臭さがちっとも無くて美味しかった。

食事の後は浅草寺に行った。日本の寺は中国と違って舎殿の中に仏像を祀っていない。参拝する時も決まった手順がある。先ず舎殿前の手水鉢の水で口を漱ぎ、賽銭箱に硬貨を投げ入れてから参拝する。参拝の後はおみくじを引いて未来の運勢を占う。次に浅草寺前の賑やかな商店街に行った。いろいろな日本ならではの食べ物売られていたが、人形焼を買って食べた。

時間はアツという間に過ぎていった。ホストファミリーともうすぐお別れだ。子どもたちがとても寂しそうに見えた。ホテルに戻る地下鉄の中では、わざと別れるという話題を避けるようにしていたが、やはり最後の別れの時は来た。ホテルに着くと、私たちは抱き合って別れを惜しんだ。

日 付：6月3日(日) 7日目

大学名：中国交通大学

氏 名：張萼

今日はホームステイの2日目、9:30に起きて本場の日本式の朝食を食べ、それから少しゆっくりした。私はGoogle Earthを使って瀋陽の家や大学、宿舎を見てもらい、ホストファミリーの人たちもタイにいた頃住んでいた家や花菜ちゃんが通っていた幼稚園を見せてくれた。

11:30、予定通りに家を出て地下鉄で渋谷に向かった。渋谷では花菜ちゃんがプレスレットを自分で作れる場所に連れて行ってくれた。記念にといっしょに2本の「花*E」のプレスレットを作った。次にハロー・キティの買い物をした。楽しい時間が経つのは早いもので、すぐに3:00になってしまった。名残惜しかったが、ホテルでお別れをした。美喜子さんも私も涙目になっていた。別れる時に中島さんがたくさんのプレゼントをくれた。私がOne Pieceとハロー・キティが好きを知っていて、ハロー・キティと One Pieceの靴下を買ってくれた。その時のことを思い出すと、今も泣きたくなる。中島さん一家のことはこれからも懐かしく思い出さう。やさしい中島さんと美喜子さん、お茶目で可愛い花菜ちゃん、恥ずかしがり屋の太介君。最初で最後の日本家庭でのホームステイかも知れないが、きっと青春時代の良い思い出になるだろう。今回のホームステイは私に日本国民の友情と真心を実感させてくれた。日本のことを思い出すたびにこの国の人々の温かさと感じるだろう。

ここまで書いても心はまだ感傷的な気持ちで満たされている。この2日間のホームステイで自分の考え方が変わったように思うが、それは中島さんの意見や提案を聞いたことと、友好的な日本国民に触れたからだ。中島さん一家に、そして中日友好協会が与えてくれた機会に心から感謝する。中島さん一家がこれからも健康で幸せでありますように……。

日付：6月3日(日) 7日目

大学名：首都師範大学

氏名：孫麗娜

今日一番楽しかったことは、何と言っても翔ちゃんや遼ちゃんと一緒に遊園地に行ったことだ。(ホストファミリーのお父さんとお母さんは翔ちゃんと遼ちゃんにお客をもてなすことを知ってもらうために、わざと子どもたちだけで私を連れて遊びに行くようにした。兄弟2人ともおとなしくて、遊園地にとっても興味を持っているようだった。きちんとしていて、まるで「小さな大人」といった感じで、とても可愛らしかった。2人とも面倒見がよく、途中「どこに行きたいか」、「何が食べたいか」、「何に乗りたいか」あれこれ訊いて来た。私の提案でジェット・コースターに乗ることになったが、3人とも絶叫。とてもエキサイティングだった。次にコンピュータゲームをして遊んだ。バスケットボールや釣りなど、ほとんどのゲームを試した。遼ちゃんがいろいろと知恵を絞ってリラックマ(Rilakkuma)を取ってくれて嬉しかった。遊び疲れたので座ってアイスクリームを食べた。大きな、超おいしいマンゴー味のアイスクリームだった。ちょうど音楽ユニットのサイン即売会があるということで遊園地には人が溢れていた。(ちなみに遼ちゃんと翔ちゃんはそのユニットのことは知らなかった)。お兄ちゃんのほうは怖いのが苦手なようで、私と遼ちゃんがお化け屋敷に入ろうと言うと逃げて行こうとした。私と遼ちゃんが冗談で切符を3枚買うと言うと、とても困っているようだったので、私と遼ちゃんはからかうのをやめた。お兄ちゃんのためにお化け屋敷に行くのはやめて、昼食をとることにした。2人は私が「何でも構わない」と言うと、冷やし中華の店に連れて行ってくれた。ずいぶん長いこと並んだ。美味しさこそ成功の道！兄弟2人とも2人前の冷やし中華を食べた後にまた主食を注文して一緒に食べていたが、その様子を見て「仲がいいなあ」と思った。

遊園地で遊んでいる時も、2人は親切に日本の簡単なゲームについて教えてくれた。いろいろと見て回った後、電車に乗ってお父さんとお母さんに合流した。集合場所は上智大学だったが、ちょうどアメリカンフットボールの試合をやっていた。とてもエネルギーで、チアガールのダンスもとても良かった。私たちはいっしょにホテルに向かった。上品なお母さん、やさしいお父さん、そしてカッコ良い愛すべき兄弟と別れるのがつらかった。一家は私のためにたくさんのプレゼントを用意してくれ、中国に帰ってからも連絡してほしいと言った。

藤森さん一家の温かい心遣いと心のこもったもてなしに感謝している。私はこの一家の中に日本と中国で一番大事にされている品性、つまり謙虚さと礼儀、温和な態度と上品な物腰、細やかさ、積極性と楽観性、独立心……見たような気がする。

日付：6月3日(日) 7日目

大学名：首都師範大学

氏名：孫鑑

朝7時、目覚まし時計が鳴った。すぐに起床、洗面を終え、身支度を整えて……7時半、チビちゃんを起こし、それから部屋を片付けた。約束通り8時には細野さんの住む部屋に戻った。

朝食の後、細野さんと直弘君と一緒に近くの公園にゴミ拾いのボランティアに行った。一家の住むマンション300世帯余りのうち約10世帯が交代で毎週末に公園を掃除するのだという。これが本当の環境保護だと思った。もともときれいな公園にはゴミはいくらもなかった。9時半前には家に帰り、テレビでOne Pieceを見た。みんなでテレビの前に座り、お菓子を食べて、お茶を飲み、一家団欒を味わった。

One Pieceの番組が終わると、浅草寺に向けて出発した。1時間ほどで着いた。浅草は本当に人気のある場所で、人また人といった感じだった。昼食に美味しい定食を食べ、2歳になる姪のために浴衣を買った。

次にスカイツリーに行った。思った通り見物客は浅草よりも多く、2棟のビルいっぱいスカイツリー関連のグッズを売る店があったのには驚いた。時間はアツという間に過ぎた。ホテルに戻らなければならない時間になった。別れる時、真弘君がとても寂しそうだったのでSkypeやメールアドレスを教えた。この家族のことを懐かしく思い出すことだろう。

ホテルに戻ると、大急ぎで荷物の整理をして、一行30数名は秋葉原に向った。ショッピング大作戦の始まりだ。それからお台場にも行った。夕食は自分たちで自由にとることになっていた。ここでは詳しく書かないが、要するに派手にお金を使った。ホテルに戻った時はぐったりと疲れ、お風呂に入ってすぐに寝た。

日 付：6月4日(月) 8日目

大学名：国際関係学院

氏 名：呂凱健

中日友好に努め、民間交流を強化する。

今日はもう訪日8日目、いつの間にか予定の半分以上が過ぎてしまったことに今日初めて気がついた。帰国の日が迫っている。いつもみんなと一緒にいたせいか、時間の経っていることにちっとも気づけなかった。本当に誰が欠けてもダメだったと思う。

午前、これまで日本一の高さを誇っていたテレビ塔——東京タワーに行った。次の代表団はきっとスカイツリーを見学するんだろうなあ……。その後、和洋折衷の日比谷公園で少し休憩した。東京はテンポの速い都市なので公園がとても気持ち良く感じた。

圧巻は次の見学場所だった。2008年に胡錦濤主席が訪日した時に食事をしたフレンチレストランの松本楼だ。松本楼は今回の訪日活動の重要な一環で、孫中山、宋慶齡と梅屋庄吉夫妻との友情、中日友好の証であり、歴史的にとっても意味のある場所である。松本楼は近代に中日両国の橋渡しの役割を果たしただけでなく、今も両国が心を通じ合わせるための掛け替えのない場所になっている。2008年5月6日、胡主席と福田康夫首相がここで夕食を共にし、日中間の10年来の「氷を砕く旅」が始まった。私たちが今日ここで食事したというのも、今も中日両国が共に中日友好のために努力していることの表れだと思う。今回のような大学生の交流は(中日友好にとって)不可欠なことだと思うが、それは決して簡単なことではない。そういう意味で、団員の誰もが今回の訪日を大事に思っている。

次に日本で第2位にランクされるという「早稲田大学」を見学した。同校は6万人弱の学生と6千人の教職員を擁する、学費も高額な名門私立大学だという。自由を尊重する校風のためか、いくつか興味深いエピソードが紹介されたが、ここでは省略する。早稲田大学の学生たちとの交流はとても楽しかった。何か具体的な知識や技能が学んだということではなく、英語、日本語、中国語が飛び交い、まるで国境がなくなったような感じがした。言葉がうまく通じなかったとしても、双方の気持ちは伝わっているようだった。みんなが楽しんでいるのを見て、こっちまで愉快的な気持ちになった。これがいわゆる「楽しさが伝染する」ということなのだろう。今回のこうした機会に恵まれたことに感謝すると同時に、日中両国の国民が更に打ち解け合い、お互いに理解を深めていければいいなあと思った。

日 付：6月4日(月) 8日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：王芳

午前中は東京タワーの見学だった。今、一番の人気スポットは新しく開業したスカイツリーだが、東京タワーには歴史の重みがある。TVドラマや映画にも東京タワーの場面がよく登場する。梁静茹の——東京タワーからの初めての眺め——という歌詞を思い出した。

次は日比谷公園の松本楼に行った。松本楼では胡錦濤国家主席と同じような応対を受けた。小坂文乃さんからは松本楼の歴史と孫文と梅屋庄吉の深い友情、孫文と夫人・宋慶齡の感動的なラブストーリーについての説明があった。梅屋庄吉は1895年に孫文と香港で知り会って以来、孫文による中国革命の熱心な支援者となった。梅屋庄吉は帰国後、さまざまな事業を手がけ、そのお金で孫文の革命事業を援助した。辛亥革命が最高潮に達していた時期、

梅屋庄吉は日本に亡命していた孫文を日本の名士に紹介し、何度も松本楼に招待している。梅屋庄吉夫人は孫文と宋慶齡の仲人であり、2人の恋愛が周囲から大反対された時にも2人を支え続けた。松本楼の1階に飾ってある写真の中に孫文と宋慶齡の結婚写真があるが、その写真の中央に写っているのが梅屋庄吉夫人だ。1階には宋慶齡がよく弾いていたというピアノが置かれていた。孫文の死後、中日関係が悪化し、それまで中日友好を支持していた人たちの気持ちも離れていったが、梅屋庄吉は中日友好こそがアジアの平和を保証するという信念から、孫文が亡くなると、4体の彫像を作って中国に寄贈している。それ以外にも中日の革命事業を扱った映画を撮ろうという計画もあったが、満州事変により実現しなかったという。こうした歴史物語に心が震えた。

午後は早稲田大学を訪問して学生たちと交流した。自分の夢についてディスカッションをした。早稲田大学のようなトップレベルの大学の学生はきっと大きな夢を持っているに違いないと思っていたが、ディスカッションを終えてみると、日本の大学生のほとんどが平凡で幸せな生活を夢見ていることが分かった。十年後の夢は、好きな人に巡り合い、温かい家庭を築き、子どもを育てることだという。どの国も若者の考え方は似たようなもので、人生観や価値観がとても似ていると思った。

懇親会では早稲田大学の数名と親しくなり、楽しくおしゃべりすることができた。学生の多くが中国に非常に興味を持ち、中国語を勉強しているとのことだった。中国の発展につれて、今後ますます多くの日本人が中国に興味を持つことになるだろう。日本の大学生にも中国を訪問し、中国の大学生と交流する機会があればいいと思った。

日 付：6月4日(月) 8日目

大学名：首都師範大学

氏 名：楊言

今日は松本楼と早稲田大学を訪問した。松本楼では胡錦濤主席並みの待遇だった。小坂さんの説明で梅屋庄吉と孫文の揺るぎない友情と孫文と宋慶齡のラブストーリーを知った。もし梅屋庄吉がいなかったら、孫文の革命事業も成し得なかつたろうし、あの「君が蜂起するなら私が財政面を支援する」という約束が、2人の鮮やかな一生を決定づけた。それは苦難の連続だったと思うが、心の底から敬服する偉大な事業だった。

梅屋庄吉は中日関係のために生涯力を尽くし、孫文の死後も2人に共通する信念を断固貫き通した。中日関係が硬い氷に閉ざされた時期もなお諦めず、中日友好のために一心に努力した梅屋庄吉に感動を覚えた。中日両国は様々な問題により、その関係は良い時期も悪い時期もあり不安定だが、国の将来を担う世代としては、中日両国の交流と中日友好のために貢献しなくてはと思った。特に日本語を勉強している者は、中日友好のために力を尽くし、心のかけ橋となり、梅屋庄吉の意志を引き継いでいかなければならないと思った。

午後は早稲田大学を見学した。言うまでもなく、早稲田大学は優れた日本の私立大学であり、校内のアカデミックな雰囲気がとても良かった。早稲田大学の学生にキャンパスを案内してもらい、大学の学習環境を肌で感じる事ができた。また、先生の説明によって早稲田大学についてさらに理解を深め、大学の建学精神が「自由」だということを知った。早稲田大学の自由の精神は学生のイノベーション的思考を育むのにはとても有効のようだった。学生は自由な雰囲気の中で3000余りのサークル活動を通して積極的な考え方を学び、臨機応変に物事にあたる術を覚えていくのだろうが、中国の大学にはこうした自由の雰囲気が足りないような気がした。キャンパスを見学した後は、早稲田大学の学生たちと「10年後の私の夢」というテーマでディスカッションをした。みんな積極的に自分の意見を発表した。早稲田大学の学生がなるべく日本語を話すように励ましてくれた。その後に行われた懇親会ではみんなで楽しく語り合った。プレゼントを贈ると、中国の工芸品(中国結び、切り絵、染付で出来た葉など)をとても気に入ってくれたので嬉しかった。中国に遊びに来るように言うと、彼らが中国文化にとっても興味を持っていることが分かり、何とも誇らしい気持ちになった。中国文化がこんなにも海外の人たちを惹きつけていることを嬉しく思った。数時間にわたる学生との交流で私の日本語も鍛えられたようだ。別れるのがとても惜しい気持ちになった。(仲良くなった早稲田の学生とは)今後も

連絡を取り合っというと思う。

日 付：6月5日(火) 9日目

大学名：国際関係学院

氏 名：李中石

午前中、三菱東京UFJ本店を訪問した。最初に営業部と貸金庫を見学したが、特に金庫の見学が印象的だった。幸運にも金庫の内部を見学することが出来たが、これはなかなか出来ない経験だった。その後、清華大学日本語学科を卒業し、北京支社から本店に研修に来ているというきれいな先輩が、銀行業務と金融派生商品について説明してくれた。簡単で分かりやすい例を挙げて複雑な経済知識を教えてくれたのでとても勉強になった。

午後は中華人民共和国駐日本国大使館を訪問し、程大使と大使夫人に会うことができた。各大学の代表がそれぞれ感想を述べた。大使はそれに真剣に耳を傾け、最後に自らの中日両国関係に関する見方について率直に話してくれた。大使の話で中日両国関係がいかに複雑かということが分かった。

大使館の訪問の後は、楽しみにしていた東京ディズニーランドに行った。子どもの頃に見たディズニーアニメのキャラクターを目の当たりにしてみんな大喜びだった。一番印象的だったのは夜のパレードだ。色とりどりのフロートが1台1台ゆっくりと園内をパレードする様子に大人も子どもも大興奮だった。もう一つ感心したことに園内で働くスタッフの協調能力の高さ、それに入園者のマナーの良さがある。たくさん家族がベビーカーを押して遊びに来ていたが、みんな自発的にベビーカーを1カ所にまとめて置いた後は道端に座りこみ、立ったりする人などいなかった。パレード終了した後もゴミがまったくなかった。「百聞は一見にしかず」、またも日本国民の民度の高さに驚かされることになった。

日 付：6月5日(火) 9日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：楊天笑

AM9:43 今日の最初の訪問先は三菱東京UFJ銀行だ。今回初めて金融機関を見学することができた。この分野の知識に乏しいので、見学の視点も浅いものだったと思うが、一番印象に残ったのは金庫だった。厚さ約1mのドアによって一つ一つ仕切られた貸金庫が外界と隔てられていた。この金庫は個人向けのもので、合法的な物品ならば誰でも預けることができるというのが面白かった。銀行の側から言うと、銀行には利用者のプライベートについて知る権利がないので、利用者が預けた物品が合法なものであるかどうかについて銀行は知ることができないために、すべてお互いの信頼関係の上で成り立つビジネスだというのが印象的だった。次に実際に業務を行っている部屋を見学した。毎日10台のパソコンの画面と各種情報を睨みながら業務を行っているという。案内係の説明によって金融業務についての基本的なことを理解することができた。職員の人たちと一緒にとった昼食は日本の「弁当」だった。包装も料理も何から何まで非常に精巧にできていた。同じテーブルに座った広報部の女性はとても若く見えたが、もうすぐ50歳になるという。同じテーブルの人たちと将来の夢や希望についていろいろと語り合い、多くの事を学んだ。

AM 10:42 中国駐日本国大使館を訪問した。光栄にも程大使と大使夫人に会うことができた。学生たちがここ数日間の訪日の成果を簡単に発表した後、大使から自分自身の経験や中日関係についての見方に関する話があった。中日両国は昔からずっと友好関係にあったが、ここ100年の間に仲たがいがいし、関係が悪化し、中国人に消すことのできない傷跡を残した。しかし、中日が友好関係を維持することは、東アジアにとって非常に重要なことであるので、中日関係を理性的に分析し、そこから学び、中日両国は共に発展していくことが求められている。そして僕たち学生にはその中で決定的な役割を果たす必要がある。今回訪日の機会に恵まれなかった人たちと比べると、僕たちは日本についての理解を深め、日本の企業や日本人に見習うべきところのあることを知った。また、ホームステイや大学生との交

流を通して大多数の日本人の中国に対する見方を知ることができた。日本人の中国に対する友好の気持ちや中国の経済発展に対する羨望は、中日両国が互いに交流し学び合うための条件であり、日本人との共同事業の一つひとつを大切にすることが必要があるように思う。要するに、日本は先進国として中国が抱えている多くの問題の解決策をすでに持っているし、日本企業はまさにそれをコントロールしながら中国市場に進出していると言える。こうしたやり方は双方にとって有利な発展モデルだと思う。

PM4:07 最後にディズニーランドに行った。が、これが今回の訪日で最も辛い思い出になった。入場後3分で2度迷子になり、どんなに探しても仲間の姿が見つけれず、やむを得ず1人であるアトラクションに飛び込んだら、前も後ろもカップルばかりで、楽しそうにおしゃべりしていた。列に並んで待っているとき、1人でもいいから訪日団のメンバーが現れないかと願ったが、期待もむなしく、やはり1人でボートに乗る羽目になった。一人ぼっちの寂しさがつのり、何ともつらかった。友だちの存在がいかに重要かを実感した。

AM2:00 明日の発表のために2時まで原稿を書いていた。明日の発表がうまくいきますように。

日 付：6月5日(火) 9日目

大学名：北京交通大学

氏 名：景鵬

三菱東京UFJ銀行への訪問は日本の銀行サービスに関する認識を一新した。サービスカウンターが防護ガラスで覆われていることもなく、全体的に開放的な感じがした。一人の日本人顧客が応対を受けていた。その様子を見ると、銀行側の応対はとても親切で、職員の熱心な仕事ぶりや責任感が感じられた。ロビーには基本的な設備のほか、団扇や雑誌、新聞が置かれていた。まるで中国の高級ホテルのようだった。そこには待ち時間を快適に過ごすための環境があった。

昼食は三菱東京UFJ銀行の職員と一緒に食べた。美味しいサンドイッチを食べながら仕事や教育、これからの銀行などについて話したが、こうした交流によって日本の大手商業銀行が社員に何を要求しているのかがよく分かった。大卒という学歴は銀行で働くには十分で、銀行は深い専門知識を必要不可欠なものとして新入社員に要求しているというよりも、むしろ総合能力のほうを重視しているようだった。金融の巨頭企業がこのような採用時の評価体系を持っていることに驚くと同時に、新入社員に対しては企業が教育訓練を行うなど、日本企業の社員に対する責任が感じられた。また、職員の高い業務能力と対応してくれた案内係のまじめな態度と責任感に感服した。

中国駐日本国大使館では程大使が訪問団に会ってくれた。座談会では、程大使によって中日関係40年来の軌跡と新時代を託す中国青年への期待が語られた。程大使の話聞いて、民間にどれだけ中日友好の基礎があるか、両国の友好関係がそれぞれの国民にとってどれだけ意味のあることであるかが分かった。各大学の代表が今回の「走進日企・感受日本」活動で学んだことや感想を発表した。団員たちの様々な視点を通して、今回の訪日が中国の大学生一人ひとりに大きな影響を与えたことをあらためて感じた。中国と日本の間には長い友好往来の歴史があり、両国の文化には多くの共通点がある。両国人民の友好関係は誰もが期待することであり、日中各界の発展にも影響を及ぼす重要な課題でもある。21世紀という新しい時代を担う青年として責任の重大さを思った。日中友好と平和のためにこれからもっと努力していこう。

夜のディズニーランドツアーは夢のような体験だった。ディズニーランドは楽しい所だと訊いていたが、まさか本当に来れるとは思わなかった。ディズニーランドを通して日本のテーマパークの環境や秩序を見ることができた。大勢の入園者にもかかわらず、清掃員が頻繁にゴミを拾ったり掃除をしたりしているのでどこも清潔だった。また、行列の長いアトラクションでは、スタッフが随時列を整理して、できるだけ多くの人をウエイティングエリアに入れるようにしていたが、その臨機応変な対応や園内スタッフのてきぱきと働く様子がとても印象的だった。

日 付：6月6日(水) 10日目

大学名：国際関係学院

氏 名：王瀚霖

飛行機の座席でこの10日間に日本で起こったことの全てを思い起こし、時間の過ぎる速さを感じている。今日の午前は6日間泊まったホテルニューオータニの水と厨房のリサイクルと電気供給システムについて見学したが、中国のホテルは日本のホテルに学ぶところがたくさんあると思った。まず、微生物によって水を沈澱させるという新手法は、普通中国で行われている化学薬品を使った方法とはだいぶ異なる、コスト節約が可能な方法だと思う。冷房は普通のエアコンではなく、電気使用のピーク時と冷房利用のピーク時をずらし、前日に作った氷による冷気を翌日の昼間に提供していた。とても賢い方法だと思う。

見学の後は歓送会だった。日中経済協会、日本商会、日中友好協会の関係者をはじめ、ホームステイ先の人たちがホテルニューオータニに集まり見送ってくれた。会場に着くと、秋葉さんの弟さんの名札しかなかったので、秋葉さんが用事で来られなくなったのかと思い電話したところ、今こちらに向かっているところだった。それをきいて嬉しくなった。まるで北京の大学に入る時に家族に見送られた時の喜びと似ていた。記念に自分で描いた絵はがきと中国の民家を紹介した本を秋葉さんにプレゼントすると、秋葉さんも「お土産」としてスポーツジムのTシャツ、ハンカチ、ブックカバー、キーホルダーをくれた。今日はウイークデーなので、1時間ほどの昼休みしかない秋葉さんは、上司に休みをもらってこの歓送会に参加してくれた。本当に嬉しかった。別れるのがとても辛かった。

秋葉さん、おばあさん、純君、必ずまた日本に来るので、その時また会いましょう！

日 付：6月6日(水) 10日目

大学名：中国伝媒大学

氏 名：趙先明

10日間の訪問が終ろうとしている。午前のホテルニューオータニの見学では、中国の立ち後れた状況と環境やエネルギー節約意識のなさを認識させられた。地下から地上までホテルニューオータニの環境への配慮は文句のつけどころがないほどだった。よく言われているように、国土が狭く、資源のない日本が技術進歩やイノベーションによって得たものの多さに驚かすにはいられなかった。

ゴミ処理、ホテルの暖房供給、冷房、廃水処理など、どれも先進技術が使われていたが、これらはまさに中国に欠けているものだと思う。技術的にも人々の意識においても日本のようになるまでにはまだ相当長い時間が必要であり、僕たちのような若い世代の力にかかっているのだと思う。お昼は訪日団のために歓送会が開かれ、責任者の挨拶や楽しい交流があった。この10日間で自分の人生に与えた影響は計り知れない。

空港に向かう車の中で渡辺さん、ガイドの呂さん、団長、郭部長、妍先生も言っていた。この10日間の旅行でいろいろと学んだことのすばらしさは、これからの人生の中で徐々に解っていくことなのだろうと思う。

今、飛行機の中でこの10日間の旅を思い返してみる。言葉では言い尽くせないほどたくさんのことを学び、いろいろなことを考えさせられた。若い時にする旅はその人の一生に影響を与えるということを聞いたことがある。その通りだと思う。視野を広げるという面でも生活の面でも間違いなく大きな影響を受けたが、それらはこれからの生活の中で徐々に感じとっていくものなのかもしれない。

飛行機が着陸すれば10日間の旅も終る。その全てが忘れることのできない貴重な思い出だ。

中日友好の理念を受け継いで学生使者としての務めに励もう！

日本よ、さようなら、日本企業よ、さようなら。

本当に多くのことを学んだ。何と収穫の多い旅だったことか！！！！

日 付：6月6日(水) 10日目

大学名：中国農業大学

氏 名：王丹

今日は日本訪問の最後の日。今、北京に向かう飛行機の中にいる。思えば、今日も感動の1日だった。朝はホテルニューオータニの人に連れられてホテルの環境施設を見学した。ゴミは分別された後にそれぞれ別々のゴミ処理場に運ばれて処理されると思っていたが、ニューオータニでは自分でゴミを処理していた。それにリサイクルまでしていた。一例を挙げると、トウモロコシの皮は焼却処理するのではなく、乾燥処理を施してほとんど臭いのない有機肥料に変える。これらの肥料は無料で農家に提供され、農家はその肥料で農作物を育てる。できた農作物は再びホテルに送られて来るという具合だ。ホテルにとっては、ゴミを有効に処理できるだけでなく、新鮮な農作物をレストランに提供できるのでまさに一挙両得である。

スタッフの案内で厨房の汚水処理システムや発電システム、バラ園を見学した。「醜」から「美」、「苦」から「甘」といった見学コースだった。中国は人口が多く、出るゴミも日本より多いので、中国もゴミをしっかりと分別し、それを処理し、リサイクル利用できるようになれば、ゴミは「宝」となってエネルギーをつくることのできるほか、環境保全をしっかりと行うことで人々の生活をより美しいものにすることができるだろう。

見学の後は荷物を整理し、歓送会の会場へ行った。2列に並んで日中経済協会、日本商会、早稲田大学、ホームステイ先の皆さんを迎えた。ホームステイ先のナカタさんとはお互いに目で挨拶した。日本人と何も言わなくても解り合えることがとても嬉しかった。ナカタさんとまたおしゃべりすることができた。ナカタさんにもっと仲良くなるために、是非北京に来て中国文化に触れてほしいと言うと、彼も私が日本にまた来てずっと付き合いが続けばいいと言った。

歓送会の後、バスで空港に向かった。ガイドの呂さんや渡辺さんと別れる時は本当に辛かった。思えばガイドの呂さんは父親のように、渡辺さんはおじいさんのように私たちを守り世話をしてくれた。本当に別れるのが辛かった。10日間の日本訪問は終わった。日本で学び、感じたことをこれからの人生に活かし、周りの人たちに伝えていこう。

学生たちの撮った写真



北京で開催された壮行会
中国日本商会の幹部の皆さんと一緒に記念撮影。初めての日本に期待に胸が膨らみます。



関西空港に到着
歓迎ボードに中国大学生訪日団の熱烈歓迎の言葉が並び 緊張も和らぎます。



ワコール本社
インナーウェアの製造以外にピンクリボン運動等の社会貢献活動にも積極的でした。



静岡県立農林技術研究所
資料館で農林技術研究所の成果を聞く。取り組んでいるのは環境に優しい農業です。



静岡県立農林大学校
農業を志す若者の情熱が感じられます。畑で実習中の学生と交流する中国農業大学の学生たち。



ヤマハ発動機本社
工場見学を終えてコミュニケーションプラザで展示してあるオートバイに跨る。女子学生でも若者だけあってオートバイには興味津々。



資生堂鎌倉工場

化粧品の製造にはクリーンな生産ラインが必要です。20年をかけて口紅1種を開発する努力にびっくり。



日本郵船氷川丸

戦前/戦中/戦後と数奇な運命を辿った氷川丸。今は山下埠頭に係留されて訪れる人に静かに歴史を語りかけます。



東日本旅客鉄道本社(JR東日本本社)

日本の鉄道の民営化・新幹線・運行の安全・経営の多角化・新技術研究開発について話を伺いました。



三菱商事本社

エネルギーからリテイル分野まで多方面に亘る総合商社の業容は中国大学生の大きな関心の的でした。



日比谷松本楼

辛亥革命の指導者孫文とその支援者梅屋庄吉の交流の場となった松本楼。説明するのは梅屋庄吉の曾孫の小坂文乃さん。



早稲田大学

大隈講堂の前で記念撮影。中国大学生にとっても早稲田の名前は周知で憧れの的でした。



早稲田大学
早稲田大学白木ゼミの学生とのグループ討論会。大部屋のあちこちで話が熱気を帯びます。



三菱東京UFJ 銀行本店
本店の見学とレクチャーのあとの昼食懇談会。日本人・中国人行員の方を囲んで質問攻め。



中国大使館
程永華大使と汪婉大使夫人を囲んで玄関前で記念撮影。緊張はしないと思っていたがやっぱり緊張。



中国大使館
各大学の感想報告のあとは程永華大使から丁寧な講話をいただく。日中友好にかける思いに感激。



ホテルニューオータニ
地下の中水製造プラントで厨房の排水が浄化される過程を見学。



歓送会
企業・大学・ホストファミリーの皆さんと一緒に記念撮影。10日間の思い出が走馬灯のように駆け巡る。

ホームステイ



日中経済協会会議室にてホストファミリーの出迎えを待つ。緊張のひと時。



歓送会の場でホストファミリーに再会。最後の交流で別れを惜しみます。



ホストファミリーと一緒に玄関の前で思い出の一枚。夢のような二日間でした。



いざこれからホームステイに出発です。引渡しの日中経済協会のドアの前で記念撮影。少し緊張気味です。



ホストファミリー一家とパチリ。娘さんとすっかり仲良しになりました。



家族同様に感じたこの二日間でした。

日本点描



高台寺の月真院で寺前住職から中国より伝わった茶の文化の話を伺う。このあと茶道の体験です。



京都の小路で舞妓さんとぼったり。思わず駆け寄って一緒にカメラに納まる。



京都の見学を終えて新幹線の車内。一日の見学が終り、寛いだ新幹線タイムです。学生同士の話が盛り上がります。



箱根温泉「おかだ」の会食後の懇親会では皆がステージに上がってカラオケを熱唱。皆の気持ちが一つに纏まりました。



ワンピースは中国の学生にとっても大人気のアニメです。今回はワンピース展が東京で開催中でラッキーでした。



ディズニーランドは幾つになっても夢の世界です。学生たちは帰国前日にやっと訪問することができました。